附錄　感想と追憶

創立の頃

狩野亨吉

京都に文科大學が開かれるについて私が行くことになつたのは、京都大學の木下總長が來られてお目にかゝり、その話があつたことが、そのはじまりである。

その時、私は辭退しました。それは當時第一高等學校長としてあり、學校の行政とでも言ふべきことに多く携つてゐた上に、その頃一高には、ある重大な問題があつて私の手で解決しようとしてゐたときであつたから一高を離れがたくあつた。この事件は、後、一高の校長となつた今村校長によつて解決せられた一の難問題であつたから、かたゞ京都大學に行くことを固辭したのである。

しかるに京都大學では新たに開かれる文科大學の學長については、まへから豫定の大西祝博士が逝去の後は、容易に定まらず、京都の方にもあり、東京大學の某教授が擬せられることもあり、また三宅雪嶺博士にもその話があつたとのことである。

かゝるうちに私も木下總長のすゝめにもよつて、遂に決意して京都に行くことになつたのである。學長となつたのは文部省側の推薦でもあらう。

京都の文科大學については、當時世間では、はじめから、東京のそれに劣るものゝやうに、きめてゐた。しかし考ふれば、京都には、歴史もあり、東京のごとく生活が騒がしくもなく、學問の府としては、立つべき將來があると信じた。京都文科大學を學問的・研究中心とすることは、當時深く考へたところであつて、そして佛教の研究、東洋文化の研究などについて特色を有つべきものと考へたのである。

當時すでに教授となることに決定してゐた人々は學問に於て、すでに令名ある人々であつた。また京都の文科大學では教授方には廣く人材を求めるといふことが、大きな特色となつたので、それまでは帝國大學では教授・留學・學位なども、所謂、赤門出、それも本科の出身者に限られてゐるやうの觀があつたのを、京都文科大學では、勝れた方々をひろく求めて、入つていたゞくことになつた。內藤虎次郎氏、幸田成行氏、米田庄太郎氏、富岡謙藏氏、西田幾多郎氏等、みな、異つた閲歴の方々であつた。東本願寺に居られた稻葉昌丸氏も、辭退せられたが、御願ひすることになつてゐた。

私は京都に居ること一年半ほどで職を辭した。それは健康をそこね、神經衰弱の氣味があつたことによるのであるが、尙ほ京都に移つた翌年の十月、父の喪にあひ、心を傷めたので、辭職の

意を決したのである。

創立當時のことを思へば、隨分と忙しくあつたことを思ひ出す。教授の人選、任命、文科大學の財政のことなどで、忙しく東京に往復したことがある。內藤湖南氏の教授任命について東京側に交渉し、法制局で穗積陳重氏と大いに折衝したことなど多忙であつた。

財政のことについては石川一氏が好意を以て盡してくれたことも思ひ出す。

學生については、その數の少いことは豫想してゐたが、學生等はよく勉强をしたことを知つてゐる。選科生には、ことに特色があつた。鹿子木員信君、吉田增藏君も選科生であつた。同志社に籍を置いて來てゐた佐藤藤太君は容貌も人と異つてゐ、たゞものでない、といふ感のした人である。何か事を起しさうに見え學生生徒の中で目立つてゐた。（談話筆記、西田）

開設の事情

松本文三郎

我が京都帝國大學が綜合大學である以上、早く文科も開設しなくては、といふ聲は既に開設の數年前から起り始めてゐたので、關係當局でも種々論議せられてゐた樣であつた。所が色々な關係でそれが遲延し、明治三十九年になつて漸く實現を見るに至つたわけである。併し宛も日露戰

爭の直後で豫算は削減されるし、何も無い所へ創造するのであるから、決して容易な事ではなかつた。

先づ建物の方は法科から階上三室を借りて、それに教室、教官室、事務室等を配置し、一時はそれで間に合せる事が出來たが、圖書の設備に就いては實に困却した。是は勿論最初から必要なものであるが、他の分科大學には全集叢書の類以外に參考し得るものは殆どない。止むを得ず教官が夫々各自の藏書を持つて來て研究に供する樣な狀態であつた。

又規則に就いても、三十九年の暑中休暇に木下總長始め準備委員が文部省に集り、學科の規定や教育方針等を作つただけであつたので、その他の事務に關しては毎日放課後教授會を開いて相談し、其の爲め非常に多忙であつた。

斯くの如くして第一年目に哲學科、第二年目に史學科、第三年目に文學科と順次に出來て行つた譯であるが、教官と學生を集めるのには、これ亦非常な苦心を要したもので、學生を集める一方法として高等學校の校長會議に出掛けて行き、校長連に生徒を京大へ勸誘して呉れる樣、賴んだ事もあつた位である。第一年目の入學者は、哲學科のみであつたが選科の中には我々教官よりも年長の者もあるかと思ふと、中等學校を卒業した許りの者もあり、其の學力も區々であり、勿論選科は入學試驗を行つて、その結果入學を許可出來ない樣な學力の者もあつたのだが、何しろ志望者が少い爲、全部許可されると云ふ始末だつた。今日の文學部の隆盛に思ひ比べて實に今昔

の感に堪へない所である。

次に規定の組織、教育の方針、教官の招聘などに於いて、既設の東大に對して誇り得る何等かの特色ある精神を具現する事に努力が拂はれた。

例へば木下總長等の考で、東洋に關する學問奬勵の趣旨と自主自由的な教育方針を抱持してゐた。また當時東大では外國文學の教授には總て外國人を聘して日本人は絶對に用ひられなかつたが、本學では必ず日本人を教授とし外國人は傭つても皆講師に囑託する事と定めた。更にまた東大では選科出身者は教授にしない規定であつたが、本學では如何なる學歴を問はず、俊秀なる者はこれを教授に採用した。然るに文部省では萬事東大を標準としてゐた爲に、種々故障を言つて來たもので、此の點で一番困つたのは内藤君の時であつた。内藤君は勿論欣諾して來たのだが、全くの獨學の人であるから法制局から履歴が無いとの理由でどうしても許可して呉れない。止むを得ず本官待遇の講師として二年居て貰ひ、その履歴で漸く教授に任ずる事が出來たので全くをかしい話であつた。

斯かる精神は學科その他の規定制定の場合にも同樣で、當時東大に未だ無かつた新機軸の制度を作るのに努力した。東大の學科制度に對して講座制度を設けたのも其の一つで、當初から現行の如く普通講義、特殊講義、演習の三段階が規定され、細かい專攻科目も第二學年目に決定せしめ、始めは一般的、而る後專門的知識を授ける方針であつた。

心理學教室は松本亦太郎君の立案に依つて出來たものであつて、斯かる特別教室を設けたのは本學が濫觴であつたし、研究室の施設の如きも同樣で、內田君が熱心なる主張者で史學科に最初に出來、東大でも後次第にそれに倣ひ始めた樣であつた。かくて我が文科大學創立に當つて具現された教育方針、制度組織には、その後各大學に對して範とするに足る精神を含んでゐた事を思ふのである。（談話筆記、時野谷）

木下總長の追憶

狩野直喜

京都帝國大學文學部の創立以來、早くも三十年を經て、近くその祝賀の式が擧げられようとするにつけても、創立當時よりの關係者として、種々感慨に堪へぬものがある。三十年を一世と云はれるが、その間、思へば、長い樣で短いものであつた。一個人としては、別に取り立てゝ云ふことも無く過ぎ去つた。たゞ創立の當初は、教授も學生もその數少く、開講に先立つて入學者の有無さへも危ぶまれてゐた程の狀態にあつたのが、三十年を經過した今日、斯く內容の充實した立派な文學部となり、益々發展してゆく姿を見るのは誠に芽出度いことゝ云はなければならない。

この樣に思ふにつけても、文科大學創立當時の京都大學總長木下博士のことは、文學部として永く記憶し感謝せなければならぬ恩人である。創立當初の事柄は他に話される方もあらう、今はたゞ總長が文科大學創立に盡力せられたことのみを擧げて置かう。

京都大學の創立當初は、まづ理工科大學開かれ、つゞいて法科、醫科の兩分科大學が設けられたが、文科大學は長らく顧みられなかつた。文科大學を設けず、他の分科大學のみあることは、大學全體の立場より見て、不可解のことである。これは、決して、文科關係者の立場からのみ云ふのではない、大學本來の使命を果すといふ點から見ても、文科大學の設置は當然のことである。然も、文部省當局の意向が何處にあつたか、その設置は永らく實現しなかつた。

しかし、文科大學設置の計畫は、京都大學創設の最初からあつたので、木下總長は獨り開設について考慮せられ、その準備のため、文部省に留學生を推薦して、その歸朝後は文科大學教授の任に當らしめようとした。そのため、明治三十一年には大西祝君が留學を命せられ、翌年には谷本富、松本文三郎兩君及び自分に命が下つた次第である。

この樣に、木下總長は、早くから文科大學設置の用意を重ねられてゐた。例へば、文科關係の圖書を僅かではあるが集めて圖書館に架藏してゐたが、この中には、日清戰爭の結果渡來した書籍類もあつた。また山陰地方で考古學的遺品の發掘せられたとき、大變喜ばれて、圖書館の二階に預けて置かれた事もある。

總長は佛蘭西法學を專門とせられた方で、佛蘭西に派遣せられてパリー大學に學び、歸朝の後法科大學教授及び第一高等學校長となり、法學博士を授與せられた。ついで專門學務局長となり、京都帝國大學創立に當つて、擢でられて總長として來任し、氣鋭の教授を率ゐてよく大學の創立と完成のために盡力せられたものである。その專門とするところは法學であるが、儒者の家に生れ、文學に興味を有ち、文科大學の創設についても常に考慮せられ、その實現に當つては、東京大學に文科大學があるとき、新らしく京都に創るためには、特色あるものとすることを心掛けられた。東洋學の研究に力をそゝがれたこともその一であつて、東洋史講座が設置以來連年增置せられて三講座あることもこの方針によつたのである。教官についても、人材の拔擢を心掛けられた。史學科開設の事を委ねるため、病軀の中を、廣島に內田銀藏君を訪ねて行かれた時の印象は今も鮮やかに殘つてゐる。

なほ特に云はねばならぬ點は、常に大學全體の立場に立つて、その發展を念とせられたことである。大學總長として、この事は當然であるが、然し學問研究に從ふ者は各々の專門に偏ることなき能はず、云ひ易くして行ひ難いところであらう。文科大學の開設は、木下總長の力に俟つところが最も多い。その創設せられて後、一年を經て、職を退かれたが、間もなく逝去せられた。京都大學の完成に身を捧げたと云つて差支ないことであるが、しかも、文科大學の創立當時においては、今日ある如き盛大な發展を豫期せられたであらうか。文學部の隆昌は何人も喜ぶところ

特に木下總長は、地下において滿足の思ひを抱かれてゐることであらう。

なほ、祝賀記念のため、物故教官の追遠室を設けて、その業績を偲ぶ計畫の中に、木下總長を加へ偲ぶべきことを自分から云ひ出て實現せられたのは喜ばしいことである。（談話筆記、藤）

文科大學創立覺え書

谷本富

京都帝國大學にやがて開設せらるべき文科大學の事について、不肖なる自分が初めて内々相談を受けたのは、明治三十年頃で、全く恩師故外山正一博士の御厚情に由り、「君の學殖を以てしては、五十歳までは大學教授として專ら斯道の爲に精進努力し、而して後適宜の方嚮を轉換するも未だ遲しとせず」と、悃々と教諭し給へる音容は、今尚ほ髣髴として耳目に在るやうに覺える次第である。蓋し由來一身上の事は實に擧げて先生の教へを仰いでゐたといへる。尤もこの際、京大總長木下博士からは、まだ何等直接に文科の事は聽かなかつたやうである。

自分と相前後して別に亡友故大西祝博士にも亦外山先生より御内談があつたさうな。抑々大西君は素、自分とは東大の同級生として、入學の際より格別昵近であり、親密眞に骨肉同胞以上だといへるが、君は卒業後早く早稻田の專門學校に勤務して、追々重く用ひられ、相應に名聲を博

せられたやうなれども、乃ち今や幸に京都に新たに帝國大學が開設せられるのを好機とし、外山先生は深慮遠謀といはうか、大西君と併せて自分をもその方へ推薦されたものといへやう。師恩眞に有難い。

斯くて大西君は先づ明治三十一年二月に海外留學の命を拜し、倫理學を專攻することゝなり、間もなく出發された。然かも自分自身は本職たる高等師範學校教授の公務上の都合を以て、やうやう翌三十二年五月に教育學修業の廉を以て、英獨佛三國へ留學を命ぜられ、而してそれより稍々後に、又特にドイツ國其他の文科大學の制度組織を取調べるやうにと京都帝國大學から囑託された。但し該辭令と同一のものはやがて大西君の方へも發送された筈である。

好事魔多しとや謂はん、大西君は不幸ドイツ國において重患に罹り、已むを得ず中途歸朝と決し、早々出帆されたらしいが、恰も自分の船と齟齬するやうなので、神戸で待合はしてくれ、久々振りに一夕臂を把つて懇談したが、それがやがて實に永遠の訣別となつたのである。爾來君は京都に岡山に專ら靜養を怠らなかつたが、その效なく、ついに公私一切の事を令夫人に遺言し、自分へ傳達し委託されて、翌三十三年十一月溘焉として逝いた。嗚呼悲しい哉、因みに君は死去の稍々前に博士會の推薦に由つて文學博士の學位を授與されたのである。

さて又自分自身の方は明治三十二年九月に出發し、幸に無事留學を了へ、剩へ歸途米國經由便宜見學をさへ許可されて、明治三十五年十二月押詰つて歸朝したのである。尤も會計上何かの都

合で表面は翌三十六年一月末に歸朝の事になつてゐるさうな。それはそれとして實に驚いた事は歸朝報告の爲め登廳の卽日、文部次官よりして、シャム國教育顧問の相談を受けた一條である。當時同國皇太子はわが國に御來訪相成り御滯在中で、佛教國より學者を招聘したき旨御申込みあり、わが文部省の內議では、京都帝國大學に文科大學を開設の事は急ぐときにあらず、ちやうど自分をその方へ向けたらば都合好しとのことで、いろ〳〵話もあつたけれども、自分としては先づ京都帝國大學木下總長の指圖を受くるが當然だとして諾否を言はず、直ちに上洛して總長を訪問したが、總長はそれも一寸面白い樣だけれども、やはり京都に住み、總長の身邊に留つて、萬事相談相手になつてもらひたいとのことで、自分も固より快諾した。のち三十六年一月東京高等師範學校教授を依願免官となり、翌二月十六日、京都帝國大學より理工科大學講師囑託の辭令を受け、京都市內に卜居したのである。それから理工科大學生の爲に、或ひは又帝大學生全體の爲に、一週二時間宛の講義を開いたが、然かも主要の任務は全く文科大學開設の準備に外ならず、乃ち總長を經て文科大學の組織等に關し稍々纏りたる意見書を提出したことさへあり、大體の腹案は早く出來てゐたといへる。然かも實際文部省においてはとかくに蜘蹰し、荏苒歲月を經過して毫も捗取らず、自分は終に意を決して文部省に詰め掛け、文部大臣久保田讓男爵に大臣室において嚴談數刻に及び、失禮を顧みず、一種恫喝がましき言辭をさへ敢てして、漸く明治三十九年度の豫算にはきつと組入れて議會に提出することの同意を得、尙ほ念の爲に在省の次官局長の立會

ひをと求めたれども、只獨り會計課長の福原鐐二郎君のみ居合せたので、同君を大臣室に呼び入れてもらひ、大臣の面前において右の顚末を話し聞かせた。事は明治三十八年の初秋と思ふが、斯くて同年末約束通り豫算は帝國議會に提出せられ、自分も直接間接に多少運動して、十一月下旬めでたく通過し、こゝにわが文科大學開設の多年の宿望は初めて達成されたのである。

（手記摘要）

文科大學創立當時の思ひ出

（昭和十年十月十日夜於學士會館、座談會）

出席者　狩野亨吉　松本亦太郎　桑木嚴翼　新村出　野上俊夫　樋崎淺太郎　（加藤仁平　肥後和男）（筆記）

野上　明治三十九年に文科大學が創設されてから今年で三十年になりますので、此秋その記念會を開く計畫をたてゝをります。創設の當時六人の先生が居られましたが、その方々の全部今に御健在で、その後のものが却つて十數人も逝去された人がある樣な次第であります。が、とにかく、創設當時の六人の方が今に御丈夫なことは誠に目出度いことでありまして、是非これら

の方々に當時の御話を伺ひたいといふ一同の希望であります。そこで今晩は、現に東京にお住ひになつておいでになる御三方に出て戴いたのでありまして、實は一々お伺ひするべきでありますのを却て或は御邪魔を致すかと思ひまして、御繁忙のところ御足勞を願つたわけであります。幸ひ新村さんもお見えになりましたので、御一緒に御話を承りたいと思ひますが、こゝにお見えになりました狩野先生が第一代の文科大學長で、私が只今その第十一代に當ります。この間には既に學部長として物故された方もあり、三十年はなか〳〵長いといふ感じがいたします。

新村　來月の二十三日は、午前に簡單な記念式を行つて、それからいろ〳〵な學會の大會を開き、また亡くなられた十餘名の教授の寫眞・遺墨・著書などを尊攘堂に陳列したり、學内の開放や罪のない餘興を催したりする豫定になつてゐるのです。

桑木　創立の最初は京都や大阪の人はあまり京大文科を利用しなかつた。僕等は一寸それが不平だつた。まあ當時大阪は東京に較べて文化の程度が低かつたがね。

松本　とにかく三十九年頃の京都は今から考へると寂しいものでした。その頃東京人は京都を知らないと共に田舍視してゐました。

桑木　實際京都は田舍だつたね。あれから十年ばかりたつてうんとよくなつた。

肥後　京都に新らしく文科大學が出來るについては、何か特別な色彩でも持たうといふことはあ

りませんでしたか。

狩野　例へば京都は古い都でお寺なども澤山あるから、佛敎でも大にやつたらよからうといふ樣な意見もあつた。

桑木　僕などは大にそれに反對した。そんなことでは大學にならないだらうと云つてやつた。哲學の方では、東大のはあまり專門的になりすぎていけないから、もつと一般的にやらなければいけないと考へて、先づ普通講義をきゝ、それから專門に入るといふことにした。然しこれは哲學・史學はまあいゝが文學の方は一寸困つた。

松本　私の方では東大に心理學があり實驗室もありましたが、古くて不便でしたから、も一つ心理學の中心を作るといふ意氣込でした。東大では論理・心理・倫理で二講座になつてゐて心理學が獨立してゐない。それで私としては京大では是非心理學を獨立させなければいけない、それから實驗室を作つて三年間に完成し而も東大を凌駕する樣なものにしたい、さうしたことが出來るなら大に盡力したいといふことを申出て、總長初め創立關係敎授等の諒解も得ましたので、出かけたのです。それで心理學講座は京都で始めて獨立したのでした。實驗室も當時としてはよほど立派なものが出來ました。それまで私はその頃高等師範に居ましたが、あそこで立派な心理學敎室を作らうといふ計劃があつた。伊澤修二さんでも、嘉納さんでも、何しろ敎育の學校だから大學以上の心理學敎室を建てようといふ考へで、校舍が大塚に移つた時七十坪ばかり

を心理學にあてることにし、私がヨーロッパで見て來たよい器械をあつめ、雜誌も數は少いが獨佛英より選擇した立派なのをすつかり揃へてゐた。その中に私が京都へ轉任することになつたので、嘉納さんに器械の方は京都へ保管轉換の手續をしてくれと無理な願ひをしましたら、嘉納さんは君が行つてしまつたら使ふ人もあるまいから持つて行き給へと許してくれました。然しその代りに講堂に大きな幻燈を据付けたいから、京都の方から幻燈器械のいゝのをよこしてくれといふのでした。こんなことで私は京都の心理學の實驗演習に大變便宜を得ました。それから雜誌も京都の方で一通り揃ふまで貸して下さいと云つて四五年借りて居りました。

加藤　當時日本研究といふ樣なことは全く問題になりませんでしたか。

狩野　どうも無かつた樣だ。例の佛敎を研究しろなどといふものはあつたにはあつたが。

野上　京都では、支那や印度や西洋には文化があるが、日本には大したものはない、といふ樣な意見の先生が多かつたやうでしたね。

松本　我々が京都へ行つて愉快だつたのは、一面の松林の中を行つたり來たりして、講義したり討論したりすることでした。ギリシャのアカデミーなどもこんなものかと思ひました。

加藤　どこが松林だつたのですか。

松本　いやあの學校の中が松林で松茸や初茸がとれて、家の子供などがそれをとりに行きました。吉田神社の赤い鳥居が松林の中にあつて、向ふに大文字山が聳えてゐるし、東京から行つたも

のには實に氣高く見えました。尤も蛇も澤山居て、野上君などそれを壜に入れて蛇の習性を研究するなどと云つてゐました。家の戸棚の中に蛇のをつたこともあります。

文科始つて以來の珍事といふのは蜂に螫されたことだつたがあれは二年目の秋でしたね。何でもいゝ松茸山があるといふので文科の方で買つた。始め百姓の娘が案内して山へ入つて行つたが間もなく娘は歸つてしまひました。それから少し行くと熊蜂が飛んで來たので私は一生懸命に杖で打つてやりました。その杖はギリシヤのコルキラの島から持つて來たもので握りに馬がついてゐましたがそれで打つてゐました。然し一匹打つと次のが彈丸のやうに飛んで來てなか〳〵打ちきれない。その間に眼鏡はおとす帽子はとばす弱りました。そこへ一匹とんで來て頭に食ひつきました。螫されたんでなしに食ひつかれたのです。すると學生が先生お逃げなさいといふ者があつたので、成程逃げるといふ事があるんだと氣がついて少しにげて笹の間に身をかくして目をつぶつてゐましたが、しばらくして目を開いて見ると目の前に澤山な松茸がありました。それが風呂敷にもつゝみきれないでポケットにも入れた位澤山な松茸でした。

新村　どうも面白い話で成瀨君にても云つたら狂言になるね。

松本　あの時谷本君が一番ひどかつた。くびから頭を螫され倒れてしまつたので、二三人で村人の家に運んで來ましたが、こんな時には山の芋をすつてつけろといゝと村の人がいふ儘に誰かがさうすると、それにかぶれたのか或は蜂のためか、とに角酷く腫れ上つて長い間なやみまし

た。ところが蜂に螫されるとリユーマチスが癒るといふことがありましてね、谷本君は多年それに惱んでゐましたが、あれ以來すつかり癒りました。どうもその山は松茸は澤山あるが、蜂が居るので人があまり入らなかつた山らしいのです。案内の娘が早く歸つたのもその爲だつたと思ひます。然し學生などはとつた松茸などを食べて歸つたわけでした。何しろこの話が新聞などにも出、獨逸の新村さんからはがきを頂いたりしましたがあれは多分四十年の十月で神嘗祭の日と思ひますから十七日でありました。白川からあがつたところでした。

桑木　大學も蜂から退治しなければならなかつたのだから大變だつた。

新村　あちらで圖書館の爲などに本をお買入になつた話がありませんか。

狩野　山本亡洋氏のを買つてくれといはれたが、くづ〳〵してゐる中によそにとられてしまつた。

新村　あれは岩瀨文庫に入つた筈です。壬生家文書などもありましたね。

狩野　あれは僕も初めは知らなかつたのだが、ふとかぎつけた。そこへ三浦君が來たから話すと、是非買ひたい今すぐに行くといふことだ、然し値段が分らないから僕にも來てくれといふので行きました。

桑木　三浦君も來任が前にきまつてゐたが、もう二年ばかり勉強して行くと強情を張つた。

松本　ラッド氏が來たのは四十年の春だつた。

野上　あれは私も覺えてゐます。講義の終つた時、狩野先生の謝辭の中に「先生の御講義の趣旨

を實際にリアライズするやうにつとめる」といはれた、その「リアライズ」といふ一つの言葉をよく覺えてゐます。

松本　あ、ラッド先生が來ていろ〳〵教へて下さるが、それは必ず實現して見せるといつた樣なことを云はれましたね。ラッド氏は來て二ヶ月位一週六時間位講義をしました。

野上　とにかく一單位になりましたから。

松本　あれは公開したが、聞きに來る者も少いし學生も少いので苦心しました。ラッド氏の奥さんも來ていろ〳〵世話されたので私の家内なども出しました、同志社の婦人をも入れました。講義が四時頃にかゝるのでお茶を出すことにし私の家内がお花をいけたりなどしました。

桑木　さう〳〵、さういふこともあつたね。

松本　だんだん人が減るので日出新聞に頼んで翌日の話の大要を載せて貰ふことにして、「宗教哲學」の大體によつて新聞に出しましたため、あまり人を減らさずすみましたが、ラッド氏は向ふでは名譽教授になつてゐるしカーネギー恩給(養老金)を貰つてゐたので日本の大學からは報酬をとらない。京大の客として來てゐるから出來る丈のことはするといつて、どうしてもとらない。そこで私は總長や大學長に相談して私が代理でそのお金をとることにしました。ラッド氏夫妻は都ホテルに泊つてをり、方々見物に出たりするので、その費用を拂ふことにしました。それでも金が剩るので日本の古美術や古畫の複製などを求めて呈上しました。ラッド氏は日本

に居る間いろんな贈物をされましたが、私が先年アメリカへ行つてラッド氏が亡くなる少し前にその家を訪問しましたが、その二階に日本から贈られたものが澤山保存されてゐて、自分が死んだら郷里の美術館に遺言で寄贈すると云つてゐました。天皇陛下から御下賜になつた花瓶などもありました。

桑木　あの頃フランス語はオリアンティス氏にやつて貰ひまして、私なども出て聽きました。河原町の天主教會の人で日本に五、六十年もゐて、日本語がとてもうまかつた。何でも日本語でやつて學生に骨折らせまいとしてゐたから、學生にはあまり爲にならなかつた。英語は同志社のロムバート、ドイツ語はシラーにやつてもらつた。西洋人はその位でしたらう。

桑木　話は飛ぶが、トンコウイズムといふのは僕が作つた言葉だ。何んでもその仲間が盛んなものだつた。

野上　その當時新村さんが作られた歌を一つ私は記憶してゐます。それは「トンコウをさかさによめばコントなり。コをカに代へて君はカント派」……。

桑木　とにかく京都ではフランス學と支那學とが結びついて特色を作つた。支那を支那的に研究せんとした。支那文學支那哲學などといふのはいかん、支那學でなければならんといふので、今はその通りになつた。今日は燉煌派に僕等も降參してゐる。

松本さんは大正二年まで僕は大正三年まで居た。八年間籍があつたわけだね。

思ひ出

藤井乙男

私は明治四十二年末に講師として來り、次いで二年を隔てゝ四十四年九月、菊池總長の時に教授に任ぜられた。幸田露伴氏とは丁度入れ替りで、吉澤助教授と二人が主として講授に當り、始めは文學史や講讀を中心にやつたが、特に講讀に就いては學生に讀書力をつける爲、大いに力を入れたのである。

私が來た當時、卽ち明治四十二年は國語國文學科は出來てから二年目で、一回生と二回生しかなく、どちらも四五人宛であつた。第一回の卒業生は九州帝大の春日政治君、龍谷大學の有川武彥君、東京外語の友枝照雄君で、兎に角創立當初は學生の數も少なかつたので、時々教室内で學生の談話などはあつても、未だ組織立つた學會などはなく、見學なども猪熊淺麿氏の指導で御所拜觀が行はれた位であつた。その代り教授は學生の個人々々の事を詳しく知つてゐて、教授と學生とはよく親和して一體となつてゐた。

學生の數が激增したのは荒木總長の時代であるが、色々思ひ比べると誠に今昔の感が深い。

（談話筆記、時野谷）

隨感

西田幾多郎

哲學科開設當時のことは私も多く知らない。私が京都へ來るやうになつたときには既に哲學科の輪廓は出來てゐたので、哲學は概論の方を桑木君、西洋哲學史の方を朝永君が受持つてゐた。私は始め、倫理の方の助教授であつた友枝君が留學するに就いて、いはゞその代りといふことで就任したのであつたが、當時朝永君も洋行中で、私と桑木君と二人が哲學と倫理學と、その兩方を受持つたやうなことである。その後倫理の方には亡くなつた藤井君が新に來ることになつて、私は宗教學の方に專任がなかつたものだから、一時その方の擔任といふことにもなつた。併しそれもたゞ二年の間だけだつたと思ふ、桑木君が東京のケーベルさんの後を襲いで轉任することになつた爲、哲學の講座は私が擔任することになつて、その後ずつとかはらなかつた。尤も野上君が洋行するに就てその間心理學の講座を分擔したことはあつた。

その頃と近頃とを比べて著しい變化といへば、何といつても學生の數の多くなつたことだ。少かつたころは自然お互の間に親しみも多かつたが、漸次それが稀薄になつたやうに思はれる。それに一つは此方の年をとつた所爲でもあらうか、近頃は學生が少し若くなつたやうな氣がする。

「哲學研究」を出すやうになつたのは、直接私が發起したわけではなくて、當時の新しい卒業生が隨分と熱心に計畫したのであつた。それといふのも、私などは東京大學を出てその哲學會に關係があつたから、自分の書きものをその雜誌に載せることも比較的自由であつたが、こちらを出た人にはやはり多少難しいこともあり、また學問といふものは始めから完成した形であるものではない、思想を練る爲の草紙といふやうなもののあつた方が、その進歩の爲にも望ましいこと、私も考へて賛成したのであつた。併し始めは所謂三號雜誌で終りはしないかと隨分氣遣はれもしたもので、まあ今日までよくつゞけて來たと思ふ。私は大學を退いてからはちつとも學會の會合に出なくなつた。もと〳〵自分の無精な性によるのでもあるが、併し若いものは若いものとしてやつて行つた方がよい、一つの時代、時代を區切つて見れば私などは出るまでもないと考へるからでもある。

確かに近年は哲學の方に於ても獨立してものを考へるやうになつて來た。明治時代は何といつても他から敎へられるといふ態度であつた。併し今となつてもまだ〳〵世界の學界から學ぶべきことはある。それを措いてたゞ日本精神だとか何とかいつて自惚れてはいけない。東洋の思想には深い東洋獨特のものがあることは事實だ。併し學問といふものには理論が大事である。それを除いて唯精神といふやうなことばかりいつて居ることは出來ない。

近ごろは大學へ行つて見ても建物が變つて時々とまどひすることがある。永らく私の居つた研

究室の建物も取壊たれるし、教室なども樣子が違つて、もとの番號のまゝでは通用しなくなつた。それにどういふものか、文科の人々はよく死ぬ。哲學の方では、深田君、藤井君の二人だけかと思ふけれど、もとの同僚であつた人々では文學科の上田、藤代、厨川君など、史學科では國史の內田、三浦、西洋史の原、坂口、東洋史の內藤、桑原君とこちらは格別に多い。創立三十年といつて格別の感想もないけれど、亡くなつた人のことを話すと昔のことがまざ〳〵と蘇つて來る。

（談話筆記、柴田）

所感

高瀨武次郎

私は明治四十年七月助教授に任命され、八月十六日の大文字の晩に京都に來た。任命は朝永さんと同じで、藤代さん米田さんなども皆同年度であつた。受持時間も三、四時間しかなく、學生も少なかつたし、加ふるに平穩無事な生活を送つた爲め、自分の勉强にとつては誠に便宜が多かつた。外國留學は明治四十五年二月から滿三年、大正四年三月末に歸朝し、その間始め一年半は支那、後一年半は歐洲に滯留し、例のやかましい澤柳事件の時には宛かもベルリンに居つたので、平靜な生活が續いた譯である。

學生は極めて少く、第一回卒業生は選科で、今宮内省にゐる吉田增藏君と滿洲醫大豫科にゐる日名靜一君とであり、本科生の第一回は今東北大學にゐる武内義雄君であつた。その後機熟して支那學會が出來た時は、狩野さんが會長で、私が副會長、私の所にある孔子の像を持つて行つて祀り、狩野さんの奥さんが花を活けて下され、富岡謙藏さんの講演があつたが、さゝやか乍らいつまでも記憶に殘る集りであつた。

また私の關係した支那哲學の講座に就いて言へば、當時狩野さんにも此の方の講義を御願ひしてゐたのであるが、狩野さんが主に考證の學を講ぜられたに對し、私は多少個人的な傾向もあつて、陽明學の立場から宋明性理の學に專ら力を入れて研究もし、講義もした。從つて自然講讀の書物もその方面のを選び、武内君らの居つた時代には「傳習錄」を用ひ、更に易を長らく續けて用ひたのであつて、斯る點は我が大學に於けるこの講座の特色とも言ふべきものであらう。

（談話筆記、時野谷）

感想

朝永三十郎

私がこちらの文學部（當時文科大學）に來任したのは創立の翌年明治四十年の七月でした。當時

哲學哲學史の講座は三つあり、各々の內容は第二、第三講座は今同樣順次に印度哲學、支那哲學で、第一講座が體系及び西洋哲學史となつてゐました。私の來任と共に、この第一講座擔任者の桑木教授が洋行されたので、その不在中松本文三郎教授が講座擔任となり、私が助教授で講義の大部分を受持ち、次いで桑木教授が二箇年の留學の後、歸朝せられたので、私が入替つて留學、三箇年の後大正二年歸朝、これと共に哲學哲學史第四講座が新設せられて、第一講座を桑木教授、この第四講座を私が擔當する事になつたのでした。此の時第一講座が體系で、第四講座が歷史（西洋哲學史）といふ事に非形式的乍ら決つたのでした。大正三年桑木教授が、東大に轉任せられたので、當時宗教學を擔當してをられた西田幾多郎教授がこれに代られました。間もなく西洋哲學史が一講座としては範圍が廣汎に過ぎると言ふので、二講座に分ける必要があるとの說が起りましたが、さて講座增設といふ事になると、他にも急設を要するものがあるといふので、部內でも意見が中々一致せず、部內で意見が一致しても文部省が承知せず、文部省が承知して豫算を組んでも大藏省が握り潰すといふ次第で、昭和二年にやつとそれが實現せられ、現在の樣に第四講座が近世哲學史、新設の第五講座が古代及び中世哲學史といふ事になりました。

これと共に田邊助教授が教授となられて第一講座を擔當せられ、西田教授が第五講座に轉せられ、翌昭和三年に退職されました。

次いで昭和六年私の退職の時に西田教授の持つてをられた第五講座を山內教授、私の擔當せる

第四講座を天野教授が引繼がれ、次いで最近天野教授が倫理學擔任に轉ぜられ九鬼教授之に代られた事は周知の通りです。かゝる譯で第一、第四、第五の三講座の關係は形の上からは第一の外に第四、第五が增設され、新につけ加はつたのでありますが內實より云へば、第一の自然的成長の結果第四、第五が分身したといふべきで、文學部創設の當時と現在とを比較すれば分量上丁度三倍に增大した譯です。その內第一講座が歷代の擔當者たる桑木、西田、田邊三教授の力によつて哲學界に寄與せる顯著な功績は周知の事でありますが、第四の方は長い間微力な私が而も廣汎な範圍に亙つた講義を擔當してゐた結果、私自らは重荷を背負うて峻坂を登る駑馬にも喩ふべき深き苦しみを嘗め、學生諸君には多くの不滿を與へたに相違ない事を思つて、誠に慚愧に堪へぬ次第であります。併し今はそれが二つに分れて、過去に於いて既に顯著な業績を擧げられ、而も猶春秋に富んで大なる將來が約束せられてゐる山內、九鬼兩教授によつて擔當せられ、學界に重きをなすに至つてゐる事は、せめてもの私の喜びであります。（談話筆記、時野谷）

感想

小西重直

教育學の講座は日本最初の講座であつて、最初谷本博士の如き我國教育學研究に關する元祖と

も言ふべき碩學がこれを擔當され講座發達の基礎を築かれ、博士獨自の學風を發揮されたのは世界の學界に對しても、非常に誇り得べき事と言へる。か樣な重要な講座の後を私が引受けて實は自分の力の足らざる事に就いて常に苦心をしてゐたが、併し先輩の後を承けて、及ばず乍ら自分も勉强せしめられる力を得た事を深く感謝してゐる。猶ほ私のやめた後に就いて心理學の方面で非常に御多忙な野上教授が、教育學の講座の御世話や、卒業生學生の御指導をも親切にして頂くのは誠に感謝に堪へぬ。また木村助教授を得た事は講座の爲め誠に幸慶と言ふべきである。同教授は哲學の造詣深いので、私自身の常に足らざる所と思つてゐた點に就て、大いに力を發揮して下さるのは、此講座の將來にとつて衷心喜びとする所である。又隔年に教育史の權威である高橋講師に、日本教育史の講義を願ひ、更に教育行政法に就いても、織田博士、佐々木博士、渡邊博士と、順次御盡力を願つてゐるのは、講座の精神の上から誠に幸せの次第と考へる。

次に私個人としては、教育學の普通講義には哲學科以外史學科文學科の多數學生の聽講があるので、純粹の學術よりは寧ろ教育精神を、お互に考へて見る態度で講義をしたのである。其事がどの位效果を齎らしたかは問題であるが、私としては文學部卒業生の多數と接し得たのは、誠に幸福とする所で、是も教育學講座の賜と感謝してゐる。教育學專攻の卒業生の內には教育學其ものゝ學術的研鑽に進む有望なる學者も相當あり、教育界に實際働いてゐる者も多數あり、日本の學問界教育界に對して相當の力を發揮しつゝある樣に思はれる。又かゝる卒業生の方面から種々研

究や修養の材料を提供される事も多く、この點卒業生に對して深謝してゐる譯である。

部長時代は微力にして學部の爲めに貢献する事誠に少なく、今猶ほ恐縮に考へてゐる。殊に仕職中藤代、坂口、深田三教授、植村助教授、五十嵐講師を喪ひ、學部にとつて、又廣く學界にとつて實に痛惜に堪へぬ次第であつて、個人としても度々の不幸に出遇ひ、常に悲痛なる經驗を繰返し、當時の事を思ふと今になほ痛恨の思ひを新にしてゐる。（談話筆記、時野谷）

おもひで

新村出

私が欧洲留學からシベリア經由で歸朝し、敦賀から京都に直行して入洛したのが、明治四十二年の四月七八日ころであつたか。浦鹽から日本海へ乘り出したときは、洋々たる春の海の乘り心地、こんな口吟もあつた。

浦じほの氷もいまは解けはてて日の本の海内春の波寄すも

自分が三十四歳の春、今から二十七年あまりの昔であつた。何しろ祇園の櫻もほころびる時分であつたらうと思ふ。感慨無量だ。諸先輩に對面し一兩日して東京の自宅にもどつたのは、花盛りの四月十日のことであつた。第三學期のことではあり、悠々自適、江戸の花を思ふ存分眺めて

から、五月の青葉どきに、京は山紫水明の東三本木、そこの信樂亭に單身落ちつき、その月十七日に教授の辭令を戴いてから、特に並び大名の格で評定の席に列したりする折々の登校で、講義には及ばぬといふこと、まことに以て勿體ない取扱ひで過ごしたのであつた。

その頃竣工しかけてゐたのが、昨今半ば取毀たれた木造の研究室であつて、暑中休暇前に室割りがきまり、自分は二階の東端に自室をあてがはれ、その隣が國語國文および言語の圖書室に定められた。或は初めは自室の中に言語學の圖書をも配置して架藏したかもしれぬ。その自室がこの昭和十年の五月ころまで、とにかく自分の札が掲げおかれて最初自分に割當てられたまゝ二十七ケ年をすごしたのであつた。新研究室の方は、在任期も末に近づいてゐる自分としては、固よりそこの新館中に一室を占める煩を避けてしまつたから、舊研究室の中に置いてあつた自藏の雜書をこの五月雨のどんよりした日和の午後に直接自宅の方に引取つたときには、これ亦感慨無極でもあつた。

圖書館長に補せられるやうになつたのは、教授昇任の二年あまり後の明治四十四年の秋であつた。研究室の方の書物は、段々館長室の方へ運んできて、あちらは殆ど形骸のみ殘してあつた有樣であつたが、昨今は館長室の書物もぽつぽつ自宅に引取つて來る始末である。館長補職の後、程なく建つたのが、東隣の陳列館。菊池總長の便宜上の取計ひで、圖書館の擴張延長といふ形を以て豫算がとられて、その後全く獨立して漸次擴大されて現在に至つた。最初は史學科の方も、

前記の木造研究室の方に設置してあつたことは申すまでもない。

史學科の陳列館に對して、哲學文學兩科の方にも堅牢な綜合研究室が建築されるやうになつたのは、大正十年前後ででもあつたらうが、それが漸次擴充されて第二期第三期の小擴張を經て今や將に一ブロックの完成を見るに至らんとしてゐる。それらの結果、あの思出の深いなつかしい木造研究室の半棟が孤影悄然として立つてゐるのを見ると、明治末年ころの事がおもひいだされ、亡友の姿が浮んでくる。あの室で、あの人とあゝいふ話があつた、この室では、かういふいきさつがあつた、などといふ懷舊の情は容易に盡きない。

自分が京大の文科大學に推薦の下話を受けたのは、創立の明治三十九年の春の頃であつたと記憶するが、同年九月から文科大學の哲學科が初めて開講され、十一月の初旬かに、自分たちの留學の辭令が出たのであつた。留學の辭令が出て程なく、十一月の中旬に、公式の挨拶や打合のために入洛して狩野學長(亨吉博士)をはじめ其時教官室あたりに居合はせた先進教授に面談した。その創立當時には、文科大學は、現在本部の建物が立つてゐる其場所に以前存在した理科大學化學教室の建物の中を間借りしてゐたのであつた。それは正門前の二階建の赤煉瓦の東西に長い建物であつたが、それは明治の末ころか大正の初めかに燒けた。その建物の二階の一室で狩野學長から紹介されて、谷本狩野兩教授たちに初對面した。狩野學長には一高校長時代にもすでに度々面識面談の機を得、谷本教授には東京で文部省内の一室でお見受けしたことがあつたが、君山教授の

方は初對面であつた。それから當時三高教授の榊君も見えたりして、亦初對面であつた。舊知の桑木君は下鴨の邸宅に訪ひて心おきなき色々の話をきゝながら柿をたべた。時季は京の名物の時雨日和であつて、なるほど京の晩秋はいゝなと思つた。柿の味はおぼえてゐないが、糺の森のもみぢはあざやかに印象が殘つてゐる。明治三十六年には春雨けぶる東山の姿を賞して初めて亡兄に案内されて都踊を見物して、京の春にあこがれたものだつたが、この時にはやつぱり秋がいゝなと感じて東京にもどつたのであつた。三年のちの四十一年の夏に來住して上田柳村君と同宿したのが鴨川の西涯。そこから五月雨をあつめて早き川の流れを柳村君と觀賞したりして、同じ五月十七日附で辭令を拜したことなども、今は思出が深い。

話がもどるが、私は明治四十年の初めに京大文科大學助教授に轉任して三月一日に横濱を出發して獨逸留學の途に就いた。ドイツ船であつて神戸碇泊の時間が短かかつたから京都へ來る餘裕が乏しかつた。七日拂曉吳淞の沖に泊して船は上海まで上らない。

吳淞の濁れる海に船泊めて故郷こひし春の夜の月

などと鄕愁にさそはれもした。ベルリンで藤井君、桑木君あとから原君、深田君、上田君、ロンドンでは又原君、パリでは榊君、獨都では藤井君に導かれて内田君や波多野君の舊居に主婦たりし其人の新寓に下宿し、佛京では榊君の世話になつて上田君の僑居であつた家而も其居室のあとがまにすわつた樣な因緣もあつた。當時在歐人にして健在なるは桑木、榊波、多野の三君と予と

のみで他の數君はすでに夙く故人となつた。

追懷し來れば筆のとめどもない。

創立當時の思ひ出

野上俊夫

明治三十九年の春頃、私が東京大學文科大學の三年生で、もう卒業も次第に近づいて來るといふ時分に、京都帝國大學にも文科が新設されるといふ噂が聞えて、たゞ何とはなしに、さういふ新設の大學にでも行くことができたらといふやうな、漠然とした氣持をもつて居たのであつた。その內に當時一高の校長であつた狩野亨吉先生や一高の教授であつた桑木嚴翼先生や、大學在學三年間心理學を教へて頂いた松本亦太郎先生が、教授として赴任せらるゝ由を聞いて、益さういふ親しみのある先生方の下で働けるならば如何に幸福であらうかといふ考を深くするやうになつたが、自分から進んで求職するやうな勇氣もなくぐづ〳〵して居る中に、桑木、松本兩先生の非常な御厚意によつて、心理學教室の助手のやうな形で京都に來ることになつたが、當時助手の定員が無かつたので雇といふ名義で九月の末に赴任したのであつた。

創立の初には先づ哲學科だけであつて、教授は六人で學生は十六人、外に選科生も十六七人あ

つた。選科生の中にはなか〳〵年長の人が居て、中にも吉田增藏君の如きは、六教授のいづれよりも年長であつたかと思ふ。

郷里から東京に出て高等學校と大學との六個年を過しただけの私には、それ以外の日本の各地に關する知識はまるで無かつたので、京都といふと、何か非常に遠い別世界であるやうな感じがして居た。何となしに平安朝の大宮人のやうな人たちばかりが居るやうな所のやうな氣がして居た。然るに實際に來て見ると、小さいながら電車が通つて居り、しかも此の電車は日本で一番古いものであるときかされたり、疏水といふ現代式な大工事が出來て居たり、殊に女學校の生徒の頭が束髪であつたりしたのには、一種の幻滅のやうな驚きのやうな氣分を味はせられた。併しだん〳〵住んで馴れて見ると、東京に比べて萬事が古風で、いはゞ文化に遲れて居て、青年を樂しませるやうなものが極めて少いのに失望し、又自分の友人が皆東京に居て、京都ではたゞ先生たちの外に僅かに同年輩の二三人が教師などをして居るに過ぎなかつたのに、甚しい淋しさを感じた。下鴨村(その當時はまだ市に屬して居なかつた)の小學校の南隣の家に座敷を借りて居たが、當時の下鴨にはまだ電燈はなく、家は殆ど皆農家で、街燈などといふものは、小學校と役場との相隣し居る所に薄暗い石油ランプかがたゞ一基だけあつたに過ぎなかつた。錢湯といふものが下鴨には無くて、出町まで歩かなければならなかつたのは、冬の夜などは殊につらかつた。

併し一面には、東京に比べて娯樂機關などの少かつたことゝ、教授と學生との數も甚だ少かつ

た爲めに、學内の親みは恰かも一家内のやうで、學問上の會合や又は遠足なども屢行はれたやうであつた。私も松本先生の講義の御手傳をする外に、毎朝八時から醫科大學の解剖學と生理學との講義を一年あまり聞いた。解剖學は鈴木文太郎、足立文太郎、加門桂太郎の三先生で、生理學は天谷千松先生であつて、今の石川日出鶴丸君が助教授であつた。今日の醫學部の古參教授の中にはその當時一しよに解剖生理の講義をきいた人々が數名ある。

哲學科より一年後れて明治四十年には史學科が創設され、翌四十一年には文學科が設けられて、内田、藤代、小川、内藤、原、桑原、上田、三浦などの諸教授が相次いで來任され、建物も今の事務室のある木造の二階建と、その東に一階の心理學教室とが出來、それに次いで心理學教室の北に二階建の木造研究室が出來て、外觀も内容も次第に整ふやうになつた。

創立から今日まで滿二十九年餘、夢の如くに過ぎた。今では文學部の教職員中創立當時から勤續して居るものは私たゞ一人となつてしまつた。それにしても創立當時の六教授が打ち揃つて今日まで健在であらるゝことは誠に目出度い限りである。

考古學教室の思ひ出話

濱田耕作

明治四十二年史學科の組織が略ぼ出來上つた次の年の九月に私は講師として始めて本學へやつて來たのでありますから、創立の際に關する事は一向私には分りませんので、たゞ考古學教室に關することだけに就いて少しく申し上げることに致します。

東京帝國大學には理學部に人類學の講座があり、坪井正五郎先生が其の教授として、傍ら考古學の講義をせられて居ましたので、私なども文科の學生でありますが、之を聽きに行つて居りました。處が京都帝國大學で史學科を設けることになつては、どうしても將來考古學の講座を作らなければならないと云ふ考が、創設の際から内田、原、桑原、小川、内藤、三浦などの諸教授の間にあつて、それを何うするかと云ふ問題になりまして、出來上つた學者を聘するよりも、若い人間を養成しようと云ふことになり、遂に私如きものが本學に呼ばれることになつたと聞いて居ります。併しながら其の初めは別に考古學を講義するには及ばぬ、それよりも丁度瀧精一氏が講師として日本美術史の講義をして居られた後を承けて、暫く美術史をやれとの事で（私はそれ迄東京の國華社に居りその方面の事をやつて居つたのでありました）、赴任以來兩三年の間私は哲學科の講義として一時間宛日本美術史を講じて居りましたが、四十五年頃から將來留學の際の準備として歐洲の考古學を少し研究せよとの事で、その方の講義をも一時間宛やり出しました。是が我が大學に考古學と云ふ名のつく講義の始まつた最初であります。

當時史學科の諸教授は私が大學に於いて、或は高等學校に於いて教を受けたことのある諸先生

であり、いづれも或は日本、或は支那西洋に關する考古學に關して深い興味のある方ばかりでありましたので、何くれとなく考古學教室の完成に向つて同情ある助力を致され、それが結成して今日の如き體容を整へるに至つたことを思ひますと、感慨無量でありまして、此等大方は物故せられました諸先生に對して、今更ながら深い感謝の情を禁じ得ないものがあるのであります。それで內田、原兩先生の如きは、私に東京への旅行などは差し留め、連年九州へ神籠石などの調査を命ぜられ、內藤、狩野、小川三博士などは、將來支那や滿洲へ調査に行かねばならぬからと云つて、北京へ燉煌の經卷を調査に行く際に私を引ぱつて行かれ、私は始めて洛陽まで旅行し、滿洲へも廻つて發掘をやることになりました。坂口先生に御伴をして宮崎縣西都原の古墳發掘にも行きましたが、此等は皆な私が講師として留學以前のことであつて、諸先生の若い人を如何に懇切に熱心に指導誘掖せられたかを、今日に至つてつく〴〵と感佩する次第であります。そして次の年からは書物を買ふ費用として考古學は先づ五百圓の金を貰うことになつたのであります。

明治四十五年卽ち大正元年、幸にも英佛獨に三年間私は留學の命を受けることになりましたのも、當時留學生の少い時分に於きまして、諸先生の盡力同情の頗る大なるものがあつたことを想像致されるのであります。私は留學中埃及考古學の權威である英國のペトリー教授の指導を受け、また前年日本へ來朝され、已に知を辱うしたセイス先生の懇情に浴し、その他ドウキンス先生リヂウエー先生などの厚意を忝うし、不勉强の私も自から彼地の學界の空氣、研究法などを體

得する機會を得ましたが、生憎世界大戰爭が其の間に勃發したので、英國に二年滯留し、獨逸をやめて伊太利希臘に行き佛蘭西に游び、大正五年二月歸朝することになりました。

嬉しいことには此の間に我が陳列館の建築は第一期の工事を終へて、私の歸朝を待受けて居り、今日と雖も未だ東京に置かれて居ない考古學の講座も官制によつて設けられて居ましたので、私は其据膳につくことになりましたのは、自分一人の幸福と云ふよりも、斯學の大なる幸福でありました。留學前美學の研究室の一隅に、或は地理學教室中に寄生して居りました考古學の標本も、已に陳列館に運ばれ、私の留學中を管理して居られた今西龍君等の手によつて、チャンと整頓せられて居りました。併し此の頃は未だ大學所藏の標本も少く、借入品が多かつたのですが、追々と之を返へして、今では本學の物だけでも這入り切らない位になつて居ります。また陳列館が追々增築せられて、昭和四年北翼が完成しましてからは、陳列室を此の部分に移し、今日に至つて居りますが、研究室は始めから今の南室の處であり、その頃から色々の人が自由に出入し、煙草の煙と茶話會が行はれるので、「カフエー・アルケオルギー」の名をつけられて、今なほ御蔭を以て繁昌致して居る次第であります。そして大正五年以來研究報告書を出版致し、今ではいつしか十三冊まで發行致しました。なほ考古學教室の日本各地に於いて、また朝鮮滿洲等に於いていろ〳〵と仕事を致して居ることなどに就いては、手前味噌にもなり、長くもなることですから凡て省いて置くことに致します。

支那學科に對する回顧

鈴木虎雄

徳川氏は教化の具として漢學を用ゐ、其の漢學は言ふまでもなく宋の程子朱子の學なりき。所謂宋學なり。明治の初、諸制の更新あり、特に十年以後、憲法發布以前に於て歐米文化心醉の時期あり、東洋の舊學は殆ど其の影を潛めんとせり。此の時政府の大學に於て古典科を設けて皇典學と漢學とを兼修せしむるの制を設く。明治の國學と漢學とが徳川氏衰亡の後を承けて、滅絶より免れしのみならず、却て更に其の隆昌を馴致するの因となりしものは實に古典科なり。續きて東京帝國大學の正科として國史・國文・漢學の諸科設置せられ、始めて明治政府に由る東洋舊學の復活となれり。是れ明治二十四五年頃の事なり。漢學科なる者は支那の經學・歴史・文學を總括せる名稱にして三科の分別あることなかりき。

我が京都帝國大學の名譽教授たる狩野直喜博士、東洋史の擔任教授たりし故桑原隲藏博士、支那哲學の擔任者にして現に名譽教授たる高瀨武次郎博士、及び菲才余の如きは皆漢學科の出身なり。嘗て支那文學の講師たりし故西村時彦博士は古典科出身なり。東洋史の擔任者たりし現名譽教授矢野仁一博士、朝鮮史の故今西龍博士は東大の史學科出身なり。全く官學に入らざりし人は

東洋史の擔任教授たりし故内藤虎次郎博士及び東洋史の講師たりし故富岡謙藏氏なり。

東京の漢學科の教授先生は德川氏の末期に修業せられし人々にして、撞木の大小に依て大鳴小鳴する底の鴻儒碩學にして、之に師事せられし我が諸先輩は亦同じく二科を兼修せられし諸君なり。余が明治三十年に入學せしとき漢學科は始めて内部的に經・史・文の三科を分ちたり、然れども是れ殆ど單に論文を書く爲の便宜なるが如き看ありて、其の授業課程に於て判然たる別あることなかりし。當時の教室に於ける講義は典籍の文義の講釋なり、或る事項を教授自身が研究綜合して口授することは殆ど之なかりし。此の間にありて先輩諸君は陽には二科を兼修し、陰には新しき科學的研究の方法を用ゐて、それぞれの事項に就きて專攻せられしものの如し。

聞く所によれば我が文科大學に支那學科の創設せられんとせしとき、二科兼修の漢學科の如き者を置くべしとの意見も有りしといふ。然るに漢學科とはならずして現に見る如く、支那哲學・東洋史・支那語學及文學として一般哲史文科に分隷することとなれり。因にいふ、東洋史の名稱は余が明治二十八年第一高等學校在學中、那珂通世先生が東洋史の名稱を用ゐて開講せられしを始となすかとおもふ。而して分隷はなせしものの、内實は互に相提攜して、學會の講演等は聯合にて相互に他科の講演を聞きて智見を廣くせんことを努めたり。諸科の研究の事項方法等益々精微に趨くによりて、現在は勢他科に屬するものを聞かんと欲して能はざることもあれども、趣旨に於て相離るべからざることは往日も今日も變りあることなし。

かくして先輩諸君努力の結果、人としては各科に優秀なる學者を輩出して本學に學びて支那學

科に關して官公私立の大學に敎鞭をとり、又は敎育家、著作家等となりし者尠少にあらず。學問としては三科共に益々科學的歷史的研究方法によりて研究の對象を闡明せんとし、各々其の成績を擧げつつあり。之を余輩が漢學科に學びし時代に比較すれば四十年許の間によくもかくまでに進歩せしものかなと驚歎せざるを得ず。今日に於て地域は比鄰の如く、資料は山積、言語の便も通じ易く、他邦學者の新研究も陸續と出で來り、余輩が學海の津頭に立ちて茫然として梁筏の發見に苦しみし當時に比べて研鑽の功頗る收め易き時節とはなれり。好學有爲の士は請ふ益々奮勵せられよ。

史學科創立當時の回想と地理學科

石橋五郎

私が文學部に關係したのは明治四十年からである。その前年哲學科を先驅として生れた京都文科大學卽ち今の文學部は、この年史學科を創設することとなり、故內田銀藏博士が專らその書策に當つてゐたが、博士は史學科中に地理學を獨立せる一學科と認むることとした。當時我が國の大學卽ち東京帝國大學では、地理學なるものは唯文科大學內の史學科の一補助學科たるに止まり、その講義も非專門家の片手間仕事に過ぎなかつた。私なども東京文科大學に學んだ時、人文地理

實は歴史地理を坪井九馬三先生より、自然地理を外國教師のリース先生より聽いたが、實は失禮ながら申譯的のものであつた。然るに內田博士は將來の我が國學界の大勢を洞察し、先づ京都文科大學に獨立せる地理學科を置いたのである。夫より數年後に東京理科大學に地理學科が設けられ、引續き東北、九州、臺北等の諸帝國大學並に東京文理科大學に半獨立若くは獨立の地理學科の設置を見たのである。この意味に於て地理學の生みの親と稱するも過言ではない。而して內田博士の地理學に對する見解は、ヘルデルの所謂歴史は連續せる地理であつて地理は靜止せる歴史であるといふ如き極端の考はなかつたとしても、地理學は史學と全く依存せる關係學科であつて文化科學の體系に屬するものとなし、之を文科大學の機構內に取入れたことは疑ふ餘地がない。

夫は兎に角として、この明治四十年に史學科が創設せられ、地理學科には專門の講義が必要とせられ、先づ私が同年十月から受持つこととなつたが翌年小川琢治教授の來任を見たのである。當時私はその本務が神戸高等商業學校教授であつたので、一週一回京都へ來講したのであるが、何分にも史學科は草創の事でもあり、地理學科にも參考書は全くなく、研究の基礎を示す地圖類も絶無であつた爲め、私は一方には重要なる洋書の購入をなすと共に、他方陸海軍兩省を駈廻つて當時迄に發行してゐた陸地測量部の地圖や海圖類を全部貰ひ受けることとなし、一年餘りで先づ最初の陣容を整へ、翌年小川教授の來任によりて地理學科の基礎を確立することが出來た。

史學科創設當時、學生は何處にもある通り、我こそは新設の京大史學科のパイオニーアたらん

として、十數名當時にあつては豫想外の多數の入學を見、その中には今の西田、淸原兩博士もあつたが、地理科專攻の士は寺田貞次君と、今は故人となつた樋口津禰太郎の二君であつた。校舍は新築とはいへ、今尙ほ恰も名利に超然たる文科そのもののやうに赤煉瓦や鐵筋の高層建築の中にあの枯淡の姿を殘してゐるバラック式木造の建物であつた。大でも學生諸君は新興の意氣に燃え、敎授は潑剌たる元氣に滿ち、殊に私は弱年を以て最高學府の敎壇に立つの光榮に感激し、每週五十哩を遠しとせず神戸より汽車で通つて來た。京都驛からは怪しげな狹軌の電車が出町まで通じてゐたが、進行が餘りにものろいので私は每時も腕車を驅つて都大路を筋かひに橫切つて荒神橋を渡り、ガタゴトと長閑な音を立てて廻つてゐた水車を左に見て校門を入り、研究室に達したのである。當時の光景は今尙ほ昨日の如く眼前に髣髴する。

爾來二十九星霜、文科大學は文學部と改められ、史學科でも陳列館の建築があつて陳列室と併究室が出來、我が地理學敎室も爲めに隆昌に赴いたが、史學科開設當時私が同僚であつた內田、坂口、三浦、內藤諸氏は皆物故し、翌々年敎授となつた原、桑原二氏も逝き、今私一人が病餘の身を橫へて往事を回想すると洵に感慨無量なものがある。併し明治四十二年來敎職にある濱田、羽田兩氏は尙ほ健在で、中村、那波、小牧、宮崎等本學出身の諸君が大に活躍してゐるのを見る時、私はいひ知れぬ喜びと心强さとを感じて、將に京大史學科と訣別せんとしてゐる。

本學部創設當時の印象

羽溪了諦

わが文學部の創めて開設された三十年前の昔を回顧して、私の先づ喜びに堪へないことは、當時の六教授――學長を兼ねてゐられた狩野亨吉先生を始めとして、谷本富先生・兩松本先生・狩野直喜先生及び桑木嚴翼先生が今なほ皆うち揃うてます〳〵御健勝であらせられることである。その後就任された教授助教授中すでに十五名の多數が物故されたにも拘らず、桑木先生を除いてはいづれも古稀に垂んとし、若しくはそれ以上の高齢に達してゐられる。最初の諸先生が御一方も缺けずに御健在であらせられることは、當時の學生であつた私共として實に力强く覺ゆる慶事であつて、本學部永遠の進展を表徵する希有の瑞相と謂ふべきであらう。

入學當初、私の受けた第一印象は嚴めしい帝大で學んでゐるといふよりも、寧ろ近代的寺小屋へ通うてゐるといふ感じであつた。先生といへば講師を加へても僅か十名ばかりであり、學生といへば選科生傍聽生を合せても二十五名に過ぎなかつたのであつて、しかも設備萬般の貧弱であつたことは言ふまでもない。併し何分にも從來わが國で唯一の存在であつた東京帝大の文科に對

立して初めて設けられたそれであるといふ事實が、自ら師弟の心を刺戟して、當時少壯教授であられた諸先生の緊張ぶりも一通りでなく、また私共學生も概して自重の念を抱き、相當眞摯に修學にいそしんだと謂つて可い。蓋しわが學部將來の運命を開拓すべき重責を荷負してゐるといふ意氣が、期せずして師弟を感奮せしめた爲であらう。從つて當時の學内には他に於て見ることのできない親しい和やかな氣分が漂うてゐたと同時に、新鮮な潑溂たる活氣が充ち滿ちてゐた。毎月一回全教授學生が一堂に集合して談話會を催し、教授學生各一名づつ思ひ〳〵の問題に就いて意見を陳べた後、自由討議に入る慣例となつてゐたが、屢々相互の間に聽いてゐてハラ〳〵させられるやうな激論の交はされたことさへもあつた。さうしていつも討論の中心となられたのが谷本先生であつたことを覺えてゐる。

當時の學生は美學專攻の本學教授故澤村專太郎君・心理學專攻の東北帝大教授千葉胤成君・教育學專攻の大阪商大豫科主事河本修三君並に横濱高工教授大西友太君など十六名に過ぎなかつたけれども、これと殆ど同數の選科生及び傍聽生があり、しかもその中には年齡經歷才能などに於て異彩を放てる人物が尠くなかつたので、精神的には非常に賑やかであつた。當時漢學に於ては既に一家をなし、現に宮内省御用掛として令名嘖々たる吉田增藏君と、滋賀縣女子教育界に於て既に功成り名遂げて今は隱退してゐられるけれども、依然同縣教育界の重鎭たる大西豐文君とは二大長老であつて、私共學生より親父のやうに敬慕されてゐた。御兩君ともすでに古稀を越えてゐら

れる筈である。その他海軍機關學校の出身で、現に九州帝大教授たる鹿子木員信君も最初の一年間選科生として就學せられ、一時北京大學教授の任に就かれたといふ噂を聞いた支那人夏錫祺君も選科生中特異な存在であつた。傍聽生の中には、英國留學より歸朝早々の大谷派本願寺連枝大谷瑩誠師や、當時京都眞言宗聯合大學の教授で、現に眞言宗醍醐派管長たる佐伯惠眼師やなどのゐられたことを記憶する。かやうに本學部開設當初は學生は少數であつたけれども、異彩の人物が收容された爲、私共はこれ等の先輩に接することに依つて得るところ尠くなかつたと謂つて可い。

當時は講義の種類が多くなかつた爲、大抵の學生は凡ての講席に列したやうである。狩野亨吉先生の東西倫理思想の綜合批判を背景とした獨創的識見に基く型破りの倫理學概論、谷本富先生が得意の教授法を活用して明快巧妙に講述された教育史並に教育學概論、松本文三郎先生の組織整然として內容充實せる印度哲學史、松本亦太郎先生の專らヴントに基く堅實精緻な心理學概論などの諸講義が、當時學生間の呼物となつてゐた。聽講に關して、私共學生の最も閉口したことは、桑木先生の海外御留學が決定した爲、出發までに西洋哲學史を講了するといふ御意氣込みで一週六時間超スピードの講義を筆記せしめられたことであつた。當時は實際先生を怨んだほど苦しめられたけれども、後になつて先生の御熱誠と御親切とに對して感謝の衷情を捧げたものは啻に私一人ではあるまいと思ふ。なほ狩野直喜先生が君子さながらの態度を以て諄々と支那哲學史

を講ぜられ、特に敬虔な表情を以て孔子の天の思想に就いて明快な斷案を下された時の感銘は今なほ私の腦裡を去らない。その他、私はギュリック講師の宗教學講義、熱田靈知講師の佛教講義（「華嚴五教章」）、オリアンチス講師の佛語講義、島文次郎先生の英語講讀にも出席した爲、殆ど他を顧みる餘裕のない生活を送つてゐた。次年度にも私の專攻が印度哲學であつた關係上、松本（文）先生の印度哲學特殊講義（印度佛教史）、「金剛經」の演習、リス・デヰズ著「初期佛教」の講讀はいふに及ばず、谷本先生の教育學特殊講義（宗教々育論及び中等教育論）、ライン著「教育學概論」の演習、松本（亦）先生の心理學特殊講義（實驗心理學）、ヴント著「心理學綱要」の演習、狩野（直）先生の「古今學變」の講讀、米田庄太郎先生の社會學講義などにも列席した爲、私の專攻學科以外に、色々の新知識を得たことを今なほ喜び謝してゐる。

因みに茲に記して置きたいことは、本學部開設の翌年、心理學專攻の藤澤乙夫君と倫理學專攻の多田淳良君と私との三人が發起して、本學内に佛教青年會を創立し、東京から近角常觀師を招聘して、創立大會を催したことである。爾來今日に至るまで、これが本學内に於ける佛教的修養の中心機關となつてゐることは、創立者の一人たる私としてこの上もなく滿足に思ふところである。また同年本學總長菊池大麓先生が一夕學内の特選給費生數名を自邸に招かれ、私もその席末を汚したのであるが、その時總長が當時の學生に取つては勿體ないほどの御馳走を惠まれ、特にうち寛いで色々有益なお話を聞かされたことは、私の在學中最も嬉しかつた思出の一つである。

このほか白川の山へ教官學生うち揃うて元氣よく茸狩に出かけ、今や目的地に達せんとした矢先突然獰猛な熊蜂の襲撃を受け、その過半は刺され、二三の昏倒者さへ出た爲、茸狩を中止して逃げ歸つたといふ印象深い珍事もあるけれども、こんな思出を書いてをれば限りがない。

實際本學部の盛んな現況を看て、三十年前の創設當時の狀況を顧みれば、全く隔世の感に胸打たれざるを得ない。すでに講座は充實し、設備は完備した上、多數の教官學生を包容せる現勢と開設當初に於ける凡て貧弱な狀況とを對照してみると、到底同一學部に屬するものとは思へないほどの差違が認められる。併し私は創立當初の貧弱な設備の裡に修學したことを些しも不幸だとは考へてゐない、否寧ろ幸福であつたとさへ信じてゐる。蓋しそれは形式的には貧弱であつたとはいへ、精神的には確かに充實してゐたからである。所詮教育の根本的契機はその設備といふやうな形式的方面に在るのではなく、主として教育者と被教育者との魂の目醒めに在ることを痛感せざるを得ない。

開講當時の記錄

千葉胤成

わが國文化のために大きな使命を負はされて、明治三十九年九月洛東吉田の里に呱々の聲をあ

げたわが京都帝國大學文學部が、その三十周年の記念會を催すに當り、創設の重任を全うせられし六教授が、今なほ御健在で文化の各方面に活躍せられつゝあることは、何よりも御目出度い次第であるといはなければならぬ。

當時第二高等學校に學び、靈の問題に惱みつゝある東奥の一青年であつた私が、東西孰れの大學を選ぶべきかに惑ひ教頭三好先生に御謀りしたが、「カント、ヘーゲルたらんとせば東京に行け」と示された。思へらく、靈の問題は心の問題であると。乃ち心理學擔任の伊藤教授に御尋ねしたところ、「心理學をやるなら京都に限る」と教へられたのである。私にはカント、ヘーゲルは問題でない。私の問題は靈の問題である。よつて唯一の權威者の言に信賴し洋々たる望みと無限の憧れとを以て、生活上の萬難を排し、遙々笈を負うて西都に新設の大學に學ぶことに決心し、九月の初め入洛して以來、大正十二年仙臺に移るまで十七年の間、こゝに學究生活を送ることになつたのである。三十の星霜を顧み轉た感慨の無量なるものがあるが、併し追憶感想を述ぶるには他にその人があると思はるゝから、私は私の覺書と記憶とをたどり、文科大學と學友會、哲學科と哲學會、心理學科と心理研究會その他につき事實を列記することにした。これによつて當時を偲ぶよすがともならば幸である。

先づ文科大學の授業が開始されたのは九月二十五日(火)で、當日は午前八時から狩野(亨)教授が學長としての訓示をなされ、第二時間目には狩野(直)教授の支那哲學講義、第三時間目には松

本(亦)教授の心理學授業についての御注意があり、文科大學開講の第一日はかくして終つた。學生は確か本科生十六名選科生十七名であつたやうに記憶してゐる。かくて十月十六日には、枳殻邸に文科大學の第一回の茶話會があり、これが第一回の學友會となつたわけである。翌四十年一月二十六日には、本部食堂にてその第二回が催され、狩野(直)教授の「支那談」、次いで桑木、谷本兩教授の御話があり、後福引などあつて散會した。又二月九日には第三回の會合があり、松本(文)教授の「禮について」御講演があつた。三月十日には學友會の最初の遠足があり、奈良の舊都に古美術を尋ねた。四月二十七日には法科會議室にて、松本(亦)教授「博物館並に今古美術展覽會所感」と題する御講演あり、谷本教授との間に論議が交されたのを記憶してゐる。十月十七日には洛北白川の邊にて茸狩が催され、一行が蜂軍の襲擊をうけたことであるが、當時京の新聞を賑はしたのは此時であつたと思ふ。超えて四十一年十月二十四日の學友會には內田教授「大學生活の意義」內藤教授「滿洲旅行談」あり、十二月十三日には、狩野(亨)學長御引退松本(文)教授學長御就任につき、祇園中村樓に於てその送迎會が催された。その翌年四十二年一月二十九日の學友會には、朝永助教授「リスボンの地震と三大哲學家」、狩野(直)教授「桃の符」、夏學生「一年行事」、野上學士「人生」、松本(亦)教授「墓の話」、內田教授「住家」等の御話あり、中々賑かであつた。四月二十四日には學友會員一行六十五名法隆寺に至り、法隆寺・法起寺・法輪寺・藥師寺・唐招提寺等を見學して奈良に至り、對山樓に一泊、翌日興福寺・東大寺・博物館・新藥師寺等を見物し

て歸つた。五月十六日には平野屋にて卒業生豫餞會あり、席上幸田露伴講師の「紋章」の御講演の後、松本(文)學長より「膽大心小」の御訓話があつた。續いて六月十八日には卒業論文口頭試問が行はれ、後中村樓にて謝恩會が催された。

かくて此年の秋には、桑木教授歐米の留學より御歸朝、教授を中心にして哲學科卒業生有志の讀書會が生れ、十二月十八日同教授邸にてその第一回が催され、桑木教授「歐米哲學界についての所觀」千葉胤成「ヴント純粹及應用心理學」があつた。その頃から文科大學の機關雜誌發刊の話が持上り、四十三年二月五日の學友會席上その相談あり、いよ〳〵「藝文」發刊のことゝなつた。翌四十四年には深田教授、大正二年には朝永教授共に歐洲留學より御歸朝、哲學科の陣容は益々充實せらるゝに至つた。學友會はその後も屢々開催せられたが、讀書會の方は大正三年桑木教授東京大學に御轉任と共に消滅した。併し哲學科は卒業生も多く、西田教授などの學風が大きな刺激となり、熱心なる學徒の間に屢々學問上の論議が行はれてゐたが、遂に月曜會なるものが生れ大抵一ヶ月一回月曜日の夕心理學研究室に集つて談話會を開くことゝなり、その第一回は大正三年十一月十二日に催され、會するもの、赤松智城・野崎廣義・櫛崎淺太郎・安部晴之助・植田壽藏・尾生光三郎・高田保馬・千葉胤成等、劈頭高田「心的因果」について話があり、質問應答議論風發深更に及んだ。その十五日には京都哲學會第一回大會あり、野崎廣義「論理的について」、深田教授「美的假象」の講演があつた。第二回の月曜會は十二月十四日に開かれ、千葉「心理學の研究法に

ついて」、第三回は大正四年三月八日、宇野「宗教は社會的ならず」があつた。かくして同人の間には哲學會の機關雜誌發刊の議起り、七月十四日集會所にて第一回の相談會あり、その後屢々會合協議をとげ、遂に大正五年一月二十七日京都哲學會發會式あり、高田「社會意識」小西教授「社會的教育學の過去及將來」松本(文)教授「佛教の美術史的研究」の講演あり、かくて四月に至り「哲學研究」の發刊を見るに至つたのである。

心理學科心理研究會等に關しては、大正二年六月以後のことは研究室備付の大福帳に審かな筈であり、殊に心理研究會については大體「藝文」彙報欄にて窺ひ得るのみならず、大正五年二月以降のことは「哲學研究」にて知ることが出來ると思ふから、こゝには極めて大要を略記するにとゞめる。

さて心理學の研究室は、最初は元第三高等學校の校舍(今は燒失してなくなつてゐるが)であつた。煉瓦建の二階正面の一室が之にあてられ、そこに東京高等師範學校より移管された器械書籍雜誌の若干が置かれてあつた。後それは當時法科の所謂グリーンホールの一室(後の第八番教室か)に移され、こゝに松本(亦)教授、野上學士の机も置かれ、現在の研究室が出來るまでこゝにあつたのである。

心理學の研究會の生れたのは四十一年(藝文に四十二年とあるは誤り)の二月十五日(土)であつて、同日午後一時よりこの室に於て催され、會するもの松本(亦)教授・野上學士・學生生徒凡て十

名であつた。席上長谷川慶三郎「兒童のタイプ」と題する米國雜誌の一論文を、野上學士亦「敎師の感化」と題する敎育雜誌にある統計的研究を紹介された。而して會の名は後松本先生により心理研究會と命せられたのである。その內建造中の所謂東洋一の研究室が出來上つたので、十月三十一日にはその落成記念の會があり、千葉胤成「書記能力及聯想反應時に關する實驗報告」、松本(亦)敎授「精神動作學」(Psycho-cinematics)の提唱があつた。かくて卒業生にして研究を繼續するものもあり、獨自の研究も出るやうになつたので、別に實驗心理學會創立せられ、大正二年四月二十六日その第一回が開かれ、松本先生の「海外に發表せられたる日本人の實驗心理學的研究」といふ御講演があつた。然るに松本先生東京大學に御轉任のことあり、六月二十七日野上助敎授の歐洲留學及卒業生の送別をかね山端平八に於て思出多き會が催され、河鹿の聲をきゝながら夜遲くまで話し合つた。松本先生はその後も、暫くは大學院學生の指導のため、御多忙の中を毎月一回御入洛あり、その度毎に同人相集りて研究の會を催してゐた。なほ又その後、實驗心理學會及心理研究會の名は自然に消滅し、大正三年一月三十一日に心理學讀書會が開かれ、それ以後此會がそれらの代りを行ふことになつて現在に及んでゐるのである。

史學科の開講

西田直二郎

京都に文科大學が創設せられることを聞いて、うれしく思うたのは、まだ第三高等學校在學中のことであつた。かゝるうちに、いよ〳〵明治三十九年に文科大學が開設せられ、その年は哲學科のみが開かれ、ついで次の年に、史學科の開講があることを知つて、非常に喜んだものである。實にその年、私は高等學校を卒業するからであつた。

明治四十年九月、新學期の開始とゝもに、史學科の講義は始められたのであるが、それはまことに淋しい陣容であつた。

教室は當時、法科大學の第一教室、第四教室などゝ、時間によつて轉々し、法科の講義のない室が、これに充てられたので、時間の變るごとに、教室を探さなければならぬさまであつた。その法科の教室は、今の法・經學部の新館のところに建つてゐた木造建築で、第一教室などは、三百人も入り得る階段教室であつて、そのうちに、史學科學生十一名、選科二名の總數が聽講するのであるから、講義としては、さぞ、しにくゝもあつたことであらう、聽くものにとつては、そのすぐれた講義に對して、勿體なくも感じられたのである。

開講の當初は、その前年、すでに教授となつて居られた内田銀藏先生と、第三高等學校教授から、本學助教授となられた坂口昂先生のお二人であつた。自然、毎日いづれかの講義が必ずあつたわけである。

そして最初の講義は、内田教授の史學研究法(毎週二時間)と、國史概論(三時間)、坂口助教授

の希臘羅馬史(三時間)、グロート・希臘史の講讀(二時間)で開かれたのである。

その後暫くして、内藤虎次郎先生が講師として來られ、東洋史概論(三時間)、清朝建國史(一時間)が始まつた。内藤講師てふ名の、まことにめづらしくも覺え、講義としては、眞に初めてのことであつたと思はれ、今も強く印象せられてゐるのである。その後の文史通義の講讀などゝ同じく清朝史の講義は、耳に新らしきものであつた。

それから國史の三浦周行先生が同じく講師として來られ、武家時代史(三時間)、古文書學(二時間)を講じられ、地理にては、石橋五郎先生の人文地理學が始まるやうになり、史學科の講義も賑かになつてきたのである。

これにしても、なほ史學の科目は、多い講義時間とは言ひ得ないであらう。しかし史學科にはこの京都大學の史學科の特色といふべきものが、これら講義の實質、内容に於てあるのみでなく制度・組織・それらを含めての精神に於てこの開講の初の時からあらはれてゐたのである。卽ち、地理學が、史學科學生の必修科目となつてゐることの外に、史學科學生のために、法學、經濟學に關する講義が、はやくから特に置かれてゐたのである。開講の當初に法科大學の佐藤丑次郎助教授の國法學、同じく財部靜治助教授の經濟學が文科大學の史學科にて講じられ、末廣法科大學教授の政治史も、史學科學生の聽講したところであつた。この種、學科の兼修については、内田先

生の意見では、歴史研究にあつては、これら社會諸科學の基礎的知識を必要とするものであり、また史學研究にあつて基礎たるのみでなく、歴史研究の徒が、社會に立ちてその活動をなす實際的方面に於てこれを要すること多い、と謂ふことであつた。而して、史學科にあつては、その翌年、二回生としては、法科大學の神戸正雄教授の財政學、同じく末廣教授の國際公法、財部助教授の統計學が、これも文科大學の史學科學生のために講じられた。

かくして、私等は、正科目の講義とゝもに、これらの講義をよく聽いたのである。それゆゑ創業期ではあるが、聽講の科目は、かなりに多く、冬の日の短かい時には、教室には、あまり明るからぬ電燈の點くまで講義をきいたものである。而して夕暗のせまる校庭を歸るときは、今まで の學校生活では經驗しない疲れを以て、而もそのうちには一種の感激をもちつゝ、學問に悅び、大學の生活に對して感謝をもしたのである。

學生數の少ないことからも來る一種の自由な氣持は、史學科の學生とも語らひて、哲學科の講義にも聽きにゆくことをした。米田庄太郎先生の社會學の最初の講義、幸田露伴講師の日本文脈論、日本文藝に於ての曾我物語の最初の講義、藤代博士の美學概論の講義など、目の前にうかぶやうに思はれる。

これら他學科の講義を聽くことを得、その間にそれら學科の友人と相識るの機會を得、それからうけた資益は忘れられない。思へば、三十年はまことに昨日のごとくに考へられる。

入學當初の感想

寺田貞次

本年は創立三十年に相當し近く記念式を擧行せらるゝに當り、自分としては眞に昨今の如く感じてゐるにも拘らず、早や斯くも歳月を經過したかと思ふと感慨無量である。自分が文科大學史學科に入學したのは、文科大學としては二年目であるが、史學科としては最初であつた。京大に文科大學が創設された當時、自分は高等學校在學中で恰も志望學校を定めなければならぬ時であつた。自分は鄕里が京都である關係上、京大以外には志望の出來ない事情にあつたので、京大に史學科の設置されんことを密かに祈願してゐたのであつた。祈願の叶つたわけではなからうが、愈々實現される事になり、然も開講が丁度自分の卒業年度に當つたので、其悅びは一通りではなかつた。早速京大史學科を志望校として提出した。其結果出來た東西兩帝大の志望者數表は、史學科開講の前年卽ち明治三十九年の末の官報か何かで發表された。京大史學科の志望者は以外に也少く、實に唯一名しかなかつたのである。此一名は確かに自分を措いて他に無いと思ふと、其悅びは又一通りでなかつた。自分は既に京大に入學した感に打たれたのであつた。然し愈々入學してみると入學者は自分一人ではなく、稍意外には感じたが、折角新設學科の開講に唯一名でな

かつたのは勿論喜ばしいことで、自分には寧ろ愉快を感じたのである。

當時の校舍は今の文學部陳列館の東の舊法科教室の東部と、其前にあつた法科の大講堂のみで今から觀ると不備なことは勿論であり、自分等學生は單に此間を往來するに過ぎないので、吾人の感想も多くは此間の出來事に過ぎなかつたのである。教室では内田博士の講義は流石に感が深いものがあつた。本館東端の小教室に同級十餘名二・三十分間宛も博士の來室を待ちつゝ、ベルンハイムの御講義を聞く悠長さは今に忘れられない。然かも内田先生流の史學研究法は、終生吾人の腦裡を脱せない。參考書を漁る風習はかくて養成されたのであると思ふと不審に堪へぬ。

二階は研究室で、書棚には參考書や製本した雜誌等が大分並んでゐた。古文書謄寫の御老人が眼鏡越しにながめるのも興味があつた。内田博士はいかにも樂しそうな樣子で、時々此處に來て參考書に引用箇所を探されてゐた。其有樣は今も尙眼前に彷彿たるものがある。

或る日のこと、同じく此書棚の前で一人の偉大な、眼光紙背に徹するやうな紳士に出會つた。後になつてそれが小川琢治博士、特に御世話になつた先生であつたかと思ふと、先生は御存じないだらうが、自分にとつてはこれが初對面で最も印象を受けたものであつたのである。

少し時は遲れるかも知れないが、當時の感想として忘れられないのは、内藤博士の東洋史、殊に清朝史の講義であつた。記者生活から初めて教壇に立たれた爲でもあらう、小さい肥つた體軀に重そうな風呂敷包を携へてやをら教壇に立たれ、頭を撫でつゝ優しい顏付で講義を初められ

た、あの恥かしそうな御姿は小生許りではない、當時の聽講者一同が深い印象を受けたことゝ思つてゐる。

此他松本文三郎博士の梵語の御講義に先生の細い眼の動かない處や、米田博士の爽快な社會學の御講義や、谷本博士の黑の高帽を側に躍るが如き雄辯、殊に黑板の使用法等實際に示しつゝ講せらるゝ處や、幸田露伴先生の婉やかな御講義等感想の深いものは多々あつた。

學生仲間でも當時深い印象を與へた者が少くない。澤村專太郎・福井利吉郎諸氏の美術、建築研究に對する熱心な態度、兼常氏の音樂三味線の稱讃、高田保馬氏の緣の廣い大きな麥藁帽子を深く被つて校庭の芝生の上に寢ころびつゝ、寸時讀書を絕やさゞる處等、一々擧ぐるに暇の無いのが遺憾である。

要するに入學當初、卽ち三十年前の創立當初の文科大學は、設備に於ては不備不完全を免れなかつたにせよ、然も吾人に與へた感想は決して少なくなかつたのである。吾々は此等の刺戟に依つて色々に動かされた。內藤博士の東洋史も大いに我が心を惹いた。然し元來自然科學に興味を有する自分には、結局一夜小川博士を其御宅に訪ひ、地理學に決心することになつたのである。思へばよく心を變へたものであつた。然しそこが史學科に地理學を置かれた有難さであるかと思ふとあながち自分の罪のみでもない。石橋先生の御指導は全く自分を感動せしめた。今に至る迄其感は寸時も失はれず、御蔭で三十年の星霜をも忘れて小樽並に高松に籠居することが出來たの

である。

然し今此處に三十年の記念を聞くに及んで、今更乍ら顧視する時、吾人に印象を與へられた諸先生の中にも將同窓の中にも既に故人となられた方も多くあるにも拘らず、自分共何等なすこともなく、又何等酬ゆる處もなく平々凡々其日を送つてゐるかと思ふと、三十年を祝するよりも寧ろ中譯なき感に打たれ、當時直接間接に御指導下された諸氏に對し感謝してゐる次第であります。

所感

小野寺精一郎

三十年前の京大文科、それは大學創立の意氣に燃えられた當時に於ける新鋭の權威者が教官に揃はれて、學生生徒の數は少く、建物諸設備必しも完備せざりしならむも、之を補うて餘りある氣魄が師弟の間に漲り、加之何となく家塾的の親みのあつた心地がして懷しさに堪へない。又所謂選科生の中には篤學の士が少く無かつた。それから幾多有爲の人材がこの門より出で、又明治三十九年の最初に見えられた教授の方々が盡く健在であつて、學者としての尊き晩年をそれ〴〵光榮の裡に送られつゝあるも衷心慶賀に堪へない。それと共に文科特有の精神的氣分を以て、吾

等をその學的良心を通じて深き自覺に導かれたる恩師の方々に對して、感恩の念を新たにすると共に、自分の現在の事業に對して一段の反省を加へて當時を偲びたい。無邪氣な挿話の一は明治四十年十月十七日、教授生徒松茸がりの親睦會に、大勢蜂にさゝれて谷本博士の「松本（文三郎先生）を刺すとき蜂もブンと言ひ」の句であつた。

思ひ出の數々

長谷川慶三郎

私が京都帝國大學文科に入學したのは明治四十年九月で、哲學科第二回目のクラス、翌年になると文學科が設けられましたし、私個人の大學入學以前の修業は英文に傾いて居りましたから、哲學科をやめて文學科に轉じ、專攻科目は英文學と云ふ事で、明治四十四年七月に同科を卒業致しました。

哲學科時代には、島田・赤松・福井・武内・檜崎・原・兼常其他の諸君と知り、文學科時代には、春日・青木・兒島・島田等の諸君と知己となり、且つ此等の方々は今以て健在で居らるゝが、英文專攻の者の中には既に世を去つた人々が多數なのは遺憾の事と存じます。入學の當時、英文專攻者は服部君・久保君・中津君・加藤君及び小生が本科生で、前川・大島の兩君が選科生で、此等の諸

君は皆無事に卒業しましたが、現在生存せるものは二名卽ち當時の服部、現今の安井定四郎君と小生とで甚だ心細い次第であります。

文學科に於て御厄介になつた先生は、上田・島・藤代・新村・吉澤・鈴木・幸田・ロンバード・成瀨其の他の先生で、幸田露伴先生が一年經つて退職せられたるは甚だ惜しい事だと思つた。既に駄目だと思つたが、あきらめのために、當時の島田現今の有川武彥君と私とが、東京迄行つて先生に復職を願つたが、其の目的を達することは出來なかつた。

上田敏先生より文學概論、英文學史、チョーサ、キーツ、コールリッヂ、ブラウーング、ドゥキンシ、ピネロ、ジョーンズ等の講義を受け、島先生よりは哲學科時代よりの分を合せて、ミルトン、スティーヴンスン、コナンドイル其他の作の講義を受け、ロンバード先生よりは專らシェークスピヤと英作文との御厄介になつたと記憶して居る。

ある學期の初めに小使が小生宛に手紙を持つて來た。見ると島先生からのものである。開いて見ると「午後一時から英語の時間である。第一に君に當てるから、一つスラ〳〵と立つて遣つて呉れないか」と云ふ意味の御依賴であつた。小生は此の御依賴を寧名譽に思ひ用意して置いた。時間が來て、當てられたから、立つて遣つた。但しスラ〳〵と遣つたか如何は別問題として兎に角遣つた。先生は次の學生に當てた。確か當てられた人は既に故人になつた馬場犀一君（哲學科選科）と記憶するが、立つて怪しげながら讀む丈けは讀んだが、二三行譯しかけてやめて仕舞つ

た。材料はミルトンの失樂園であつた。やがて馬場君は失樂園と云ふ名丈けは、久しい以前より聞いて居たが、實際に接して見ると斯んなものか、何だか大した作とも思はれないと云ふと、島先生も左樣云ふ論者も無い事はないと謂はれたが、何も內容を知らぬ學生等が大概は此の說に贊成する樣な氣分で、是がやがて、當てられても立つて遣らぬ伏線となつた樣に見られる。日本の學生が語學修練に無精なる事は今に始まつた事ではない。

上田先生は文學科開設當時より少しく後れて歸朝せられ、初めて講義せられたのがチョーサのカンタベリ物語のプロローグで、面白く且つサヂェスティヴのものであつたが、ある時一人の學生がチョーサと云へば英詩の父と云ふ位置を占めて居ると聞いて尊敬して居たが、實物に接して見るとロングフェロの詩の言葉の古い樣なものに過ぎないと思ひますが如何ですかと先生に問ひかけた。先生は暫時沈默せられて居たが、やがて口を開きロングフェロの詩でも、あるものは絕妙に近いものがありますと答へられた。此の學生は漢詩に趣味を持ち、英詩の名篇は漢詩に近きものと想像して居つたものらしく、チョーサの詩には餘り興味を持つて居なかつたので、上田先生の折角の御答もピンと頭に響かなかつた樣であつた。

又私は卒業後一年を經て小樽に行き、そのうちに休暇を利用し京都に伺ふ積りなりしに、ウカウカ二三年を經過し、而して倉皇として京都に行かなければならなくなつたのは、上田先生の訃に接したゝめであつた。先生の死は今でも殘念に思はれてたまらぬのである。

桑木先生が歸朝せられ、新村先生が次に、又少し後れて上田先生が歸朝せられ、學内に雜誌誕生の必要が濃厚となつて來た。露伴先生の命名にかゝるものと聞いて居るが、藝文と云ふ雜誌が生れた。數號重ぬるに及んで益々華々しきものとなつた。島先生の劇の論文、上田先生の綜合藝術及びヴェルファーレンの譯詩等今以て記憶に新しい所である。其後各分科の雜誌が出來、藝文の從來内容となせるもの大半はそれ等の雜誌に奪はれたるにもかゝはらず、以後數年つゞきたるは主として新村先生の御盡力に依るものと察して居る。そも〳〵吾々の在學中は、現今の文學部の創業時代にて、現今の完備せる内容に比較すれば遜色なしと斷定することは得ないが、あらゆる方面に元氣潑溂として誠に愉快なる時代であつた。蓋し藝文も亦其の反映の一つであると見做すも敢て誤でないと信ずるのである。

明治から大正へ

天野貞祐

明治四十二年に私は京都文科大學に入學し、「哲學及哲學史」を專攻科目に擇んだ。この年桑木先生が留學より歸られ、朝永先生が三年留學の途につかれた。「哲學及哲學史」の教官は桑木教授たゞ一人、專攻科目の講義は教授の普通講義、特殊講義、演習だけであつた。專攻學生は三回に

二人、二回になく一回に私達三人。普通講義は哲學史概説、特殊講義は「現代の哲學」であつた。「現代の哲學」は桑木先生が歸朝後最初になされた講義で内容の充實した潑剌たるものであつた。先生の永い大學教授生活において最も愉快になされた講義の一つではなかつたかと私には察せられるのである。當時桑木教授の名聲は私をして住みなれた東京を去つて京都に遊學せしむるに充分な力を有つてゐたが、考へてみると哲學界隨一の大家として社會から認められてゐた教授はまだ三十代の壯年學徒だつたのである。演習には「純粹理性批判」を用ゐられた。高等學校にまだ哲學といふ科目がなく且つ哲學思想の一般に普及してゐなかつた爲めに、私などはカントの著書を全然讀んでゐなかつた。「人間の理性は特別の運命を有つてゐる」といふ最初の一行から教へていたゞいたのである。後に私がカントの飜譯に用ゐた譯語の如きも極めて少數のものを除けば凡てそれをこの演習において先生から學んだのである。

私達が二回生の時西田先生が招かれてわが文科大學の人となられた。嘗つてその名を聞いたことがなく、初めて教壇に見たこのひどく陰鬱に見える哲學者において人は直ちに尋常ならざる或ものを感じたであつたらう。けれども後年の西田哲學の創設を誰が當時想望したであらうか。「いへつくりらの棄てたる石は隅の首石となれり」といふ言葉を私はしみじみと考へさせられるのである。

私は明治四十五年卒業同年九月から大正三年七月まで哲學倫理學研究室の副手をつとめた。倫

理學講座にはその頃專任教授なく桑木先生が兼擔され、西田先生は元來倫理學の助教授といふことであつて純哲と倫理學とは研究會も研究室も全く一緒であつた。倫理學專攻錦田義富君のあとをうけて私は副手を命ぜられたのである。私が副手の時內田銀藏先生に請ふて哲學會公開講演會の講演をしていたゞいたことが二回あつた。「世界」「時」といふ先生の二論文はこの講演を機緣として成立したものである。當時において既に時間性といふ形而上學の根本問題をとり上げ精密な分析を試みられたといふ一事、もつて先生の非凡なる學問的洞察を窺はしむるに足ると思ふ。また他の時私は西田先生に哲學會公開講演會の講演を御願して承諾を得た。然し講演會の日は近づいても一向に題目を知らしていたゞけない。日が迫るので淸風莊の北にあつた先生の御宅へ題を伺ひに行くと大谷大學に行つてをられるとのこと。據なく事務室の電話をかりて（文科大學にはたゞ一本の電話が事務室にあるだけであつた）お尋ねすると「自覺に於ける直觀と反省」といふ題だと言はれる。現在の私にとつては凡そこの命題ほど親しみの深いなつかしい題目は少ない。けれどもこの種の問題がまだわが國哲學界の關心事として討究されてゐなかつた時代において數から棒に、しかも電話でこの題目を聞いた私は到底直ぐにはのみこめなかつた。それで念を押して「自覺に於ける直觀と反省」ですかと御尋ねすると、さうだといふ御答である。たまたま事務室に來てをられた米田先生が電話でなにを面倒なことを言つてゐるのですかとお尋ねになつた。西田先生の講演の題目なのです、と答へたことまで私には忘れられない。その頃は一そう無口だつ

た西田先生は恐らくこの題目を誰にも話されたことは無かつたであらう。然し如何にながらく如何にくり返してこの問題について考へに考へぬかれてゐたことであらうか。わが國の哲學にとつてまことに重大な意味をもつこの題目が電話によつて――先生とはあまりにも緣遠いこの文明の利器を通じて初めて感性的な形を取つたことも私には忘れられない思出である。その翌日先生はわざわざ研究室へ來られて昨日の題は止める、「ベルグソンの哲學」といふ題で話すと言はれた。わが學界において初めて純粹持續の考を問題としたものがこの講演で、「ベルグソンの純粹持續」といふ先生の論文はこの講演から成立したものである。その後間もなく「藝文」誌上には「自覺に於ける直觀と反省」といふ論文が現れて來た。そうしてわが西田哲學の大建築はおもむろに建て始められたのである。

滿二十年前の秋の想出

務臺理作

私は大正四年九月に文科大學哲學科に入學した。まだ舊制度の時分で、九月十三日にバラック建の法科大講堂で宣誓式が行はれた。荒木總長の訓辭の後松本文科大學長の前で銘々が署名をした。その折の哲學科の同年生は二十二三名であつたと思ふが、その中で已に哲學の土田杏村君、

倫理學の宮村義也君、教育學の龜山宥海君、矢田篤君等が續いて物故されてしまつた。日記を見るとその翌日十四日から講義が始まつて、その日は深田先生の美學、千葉胤成先生の心理學の講義をきいたとある。千葉先生はその年多分初めて講師になられたのではなかつたらうか。その日寺町竹屋町に岸田劉生氏木村莊八氏の作品展覽會があつて、土田杏村君と一緒にそれを觀に行つた。十五日には上田敏先生の英文學概論、藤井先生の倫理學、米田先生（當時は講師）の社會學の講義をきいた。米田先生の講義からはかなり深い印象を受けたものであつて、先生の早口の講義をノートにとるのは仲々容易でなかつたし、數多い外國語、人名、書名などまことに閉口した。私の第一印象は何となくヴントの寫眞像に肖て居られると思つたことであつた。十六日には西田先生の心理學、松本先生の宗教學概論、朝永先生の西洋哲學史をきいた。西田先生の心理學は當時野上先生の御留學中であつたので、先生がそれに代られてヴントの心理學概論を講義せられたのであつた。先生は和服で靴を穿かれて風呂敷包みを手にうつむき勝に教室に入つて來られた。その時の第一印象を未だに忘れることが出來ない。當時私は先生の「善の研究」と、前年に出た「思索と體驗」を讀んでゐたのであつたが、先生に御目にかゝつたのはその時が全く始めてであつた。十七日には深田先生の西洋美術史をきいた。これは一週一時間で、ルネッサンス前期の御話であつた。その時分にはまだ深田先生も隨分お若かつたわけであつた。二十日に西田先生の哲學概論、それに續いての特殊講義でボルツアノ、ブレンターノよりフッセルに到る現象學諸思想について

前年度より引續きの講義をきいた。

私はその時御所の東北裏側の築地に路一つで隣合ふやうな家の二階を借りてゐた。その時分はまだ同志社前の通りに電車もなくて、まことにあの邊は靜かであつた。その頃私の哲學上の興味は、ニーチエ、ベルグソン、ジェームスなどから次第に西田先生の講義を中心としたブレンターノやマイノングやリップスなどの方へ傾いて行つた。その當時私にはフッセルは仲々むつかしく何とも齒の立たないやうな感じがあつた。その時分は丁度、歐洲大戰の最中であつて、獨逸の哲學書は全く輸入杜絶となり、研究室の書物を大勢で融通し合つては借用したものである。その頃の哲學研究室では山内得立教授が助手をして居られ、美學の教室では植田壽藏教授が矢張助手をして居られた。

その中に私は下加茂の森のすぐ裏手の素人下宿へ移つて毎日糺の森の下を通つた。秋も更けて十一月十日には大正天皇の御卽位の大典が京都で行はせられて、その前後全市は歡びの渦卷となつた。大學の講義も相當期間休みとなり、その幾日間は一般に公開されて祕藏の古美術品、古文書類が陳列された。京都博物館も記念古美術館となり、大德寺あたりでも祕藏品を公開し、また帝展、院展も同時に岡崎公園で開催された。この美術展覽の催しは入學當初の私の心に非常の動搖を與へたものであつて、私はそれからしばらくの間全く日本古美術に動きのとれぬ樣に捉へられてしまつたのであつた。私は七條の博物館で初めて高野山の二十五菩薩來迎の大幅、藥師寺の

阿彌陀如來像、蓮華圖、などを見て、全く何とも知れず魅せられてしまつたのであつた。私はその時分全く日本古美術專攻を思ひ立つて居つた。土田杏村君も矢張りこの暴風に相當卷き入れられて居つたやうであつた。

これは決して私一個人の動搖と云ふだけでなく、あの時期に日本古美術に關する異常の魅力に捉へられたものが相當に多かつたではなかつたらうか。今想出しても何となくあの秋はしんみりとなつかしみの多い秋であつた。

その中に冬になつた。十二月十二日には貴船、鞍馬の山々に雪がまつ白く降つたと書いてある。糺の森は落葉して樹立も明るくなつた。そのうちにまた私には、哲學特に現象學派の哲學に對する興味が蘇へつて來て、古美術に對する氣持も淡らぐと云ふではないが、大學でそれを專攻して見ようと云ふ樣な、當時の私にとつて全く無謀に近かつた考も次第に遠退いて行つて、漸く落付いて哲學の書物を讀むことが出來るやうになつた。十二月の末日には下加茂から田中村小學校の北裏の家へ移り、それが矢張り一つの機となつて哲學を專攻する考を愈々確めることになつた。想へばそれは丁度二十年の昔の秋のことである。

その頃のこと

矢野禾積

私が京都大學の英文科に入學したのは大正四年九月の事で、當時は「文學部」とは言はないで「文科大學」と呼び、松本文三郎先生が「學長」であつた。いづれその月の二十日前後から講義が始まつたのであらうが、どうも勝手がよく解らず、先輩の忠告に從つて、所謂普通講義の履修に專心した。

その普通講義といふのは藤代禎輔先生の文學概論と獨逸文學史、新村先生の言語學概論、藤井乙男先生の「國文學史」(江戸時代の小說)、吉澤義則先生の國語學、鈴木虎雄先生の支那文學史、上田敏先生の英文學史等すべて七講義であつたが、英文學專攻學生は、別に島文次郎先生並にロンバード先生の英語講讀、米田庄太郎先生のラテン語、フランス人擔當のフランス語を履修するの義務があつた。入學當初は殊勝千萬にも獨逸語の勉强をつゞけるつもりで所謂第二語學にも出席して見たが、何れも午後三時から五時頃迄の間に行はれるものとて、とても精力がつゞかず、二ヶ月の後に脫退の已む無きに至つた。尤も英語の方は專門の事でもあるし、大に勇を鼓して、上田敏先生が二回生のために講ぜらるゝ特殊講義(十八世紀文學)と講讀(沙翁の曲とシェリダン

の喜劇）とに出席したのみならず、後には短期間ではあつたが三回生を中心とするボオドレエルの講讀傍聽にまで出かけたものである。

上田先生の講義ぶりに就いては、私は既に幾度か方々で語つて居るので今敢へて茲に繰返さない。が、とにかく趣味津々として眞に盡きせぬ妙味をたゝへたもの、私は先生の講義によつて「學問の味」といふものを如實に示されたやうに思つた。私の英語の舊師の一人は、田舍の高等學校を出てはじめて東大に入學した時、ラフカディオ・ヘルンからロセッティの詩の講義を聽かされ、夢想だにしなかつた新らしい世界の展開に心から陶醉したと語られた事があるが、私が上田先生の講義から受けた感銘も亦正しくそのやうなものだと言へよう。

一體學生にとつては、教師の休講程嬉しいものは無く、恰も「儲けた」やうな氣持がするのが常であり、私もそれを經驗する事では人後に落ちないのであるが、上田先生の休講の場合には全く「償はれざる損失」と言つた風の氣持を痛感させられたものである。而も私などは、先生が教壇に立たれる最後の年だつたので、大正五年の四月以後、卽ち昔の第三學期には、先生の休講は實に夥しく、それだけ私たちの心は淋しかつた。

それは恐らく大正五年七月十日の朝の事であらう、私は大阪朝日の社會面に、思ひもよらぬ上田先生の訃報を見出した時の、あの驚きと失望とを未だ忘れ得ない。それは實は非常にエゴイスティックなものであつたかも知れないが、とにかく自分はこれから如何したらよいのかわからず、

全く途方に暮れたのであつた。

あゝした場合、世間が如何に出鱈目な噂を立てるものであるかは、その直後後任教授の下馬評の中に、有力なる候補者として永井荷風氏の名が擧げられて居たといふ事からでも容易に知られる。

洛東法然院に於ける先生の法要を終へ、更に東に歸り行くクラーク先生を見送つた後、私は故山の人となつたのであるが、「京大文學部招聘に應じ、故上田教授の後任として自分が就任する事になつた」といふ通知を、クラーク先生からいたゞいたのは八月になつてからの事である。然し此時クラーク先生を横濱の假寓に訪れて直接交渉の任に當られたのは、藤代先生で、東京に於ける葬儀を終へての歸途だと言つて、眞夏のフロックコオトに淋漓たる流汗を拭はれて居たといふ事を、後になつてクラーク先生の口づから承はつた事がある。それから推せば、京大文學部が上田先生の後任としてクラーク先生を迎へる事に決したのは眞に電光石火の間に於てゞあつたと言つてよからう。私は當時のこの敏速にして而も適切至極の處置を思ふ毎に、目頭の熱くなるのを覺える迄に感激するのである。

創立當時の思出

伊津野　直

いまの本部正面の建物ができる前に、三高時代からもちこしたふるい煉瓦造の講堂がそこにたつてゐた。火災にかかるまで理工科大學の所屬であつた。文科大學はその講堂内の三室をかりうけて呱々の聲をあげた。一は教室、一は心理學實驗室、あとの一に學長室、教官室、事務室、小使室といふ風に、にぎやかな寄合世帶がいとなまれた。

文學部もいまこそ二千五百名近くの卒業生を出し、五百人を超ゆる在學生を擁してゐるが、創立第一年にはまづ哲學科だけが開設されたので、本科選科あはせてわずかに三十二人、教授も學長をくはへて六人、それに講師が二三人くらゐであつたかとおもふ。

創立當時の規模にしては豫算がたつぷりすぎて、年度内につかつてしまふのにさうたう骨がをれた。そこへもつてきて、もう三月もなかば過ぎてゐるのに、狩野學長などは擔任の倫理學にわりあててあつた圖書費をまだ一文もつかつてをられない。それを報告におよぶと、いや、ほんたうの研究をするには書物なんかいらない、といつて在任中先生はたうとう一冊の本もかはれなかつた。

金があまつて仕方がなかつたのでタイプライタを一臺奮發した。その頃はまだタイプライタなんて贅澤そのもののやうに考へられてゐた時代で、それを敢てしたのは全大學中文科がはじめてであつた。丸善の大阪支店がわざわざ人をよこして打方ををしへてくれたものだ。

ある日狩野學長に、このタイプライタにはエクスクラメイション・マアクがありませんねといつたら、先生すました顔で、そんな符號は世のなかに不要なものだと、折にふれてもらされた、さういふ含蓄のある、おもしろい先生のことばが、まだ他にもいろいろ記憶にのこつてゐる。

翌年の秋學友會の催として大文字山の麓で松茸狩があつた。熊蜂襲擊のことは當時の語草となつてゐるが、山にはいつて一時間もたつたとおもふ頃、ふと下の方をみると、心理學の松本教授が熊蜂の群にかこまれてスプッキをふりかざしながら、うけつながしつ、帽子や眼鏡をふつとばし、髮もおどろに奮戰苦鬪してをられる。おぼえず聲をかぎりに、地べたを這つておにげなさい！　先生もそれと氣がつかれたのか、すぐさま重圍をついてあやふく難をまぬがれられた。谷本博士の遭難は山をくだつてからはじめて耳にした。

二年目の初夏これも學友會の催だつたとおもふが、ボウトレイスの慰勞をかねて保津川下をやつたことがある。龜岡からくだつて途中までくると、おもひもかけぬ夕立がおそつてきた。舟底にしいてある毛布や莫蓙をかぶつて嵐山へつく。三軒茶屋で晩餐の宴がひらかれる。終列車のまぎはまでさはいだ擧句、外へでてみると、あふれた雨水が川のやうに道路をながれてゐる。それ

をわたつて嵯峨驛へいそいだ時のみんなの樣子といつたらなかつた。

翌朝のことである、いま宮內省御用掛となつて本年喜壽をいはれた吉田增藏氏――當時の學生中最年長者であつた――が小田原提灯を片手に、憔悴しきつた顏で事務室にあらはれた。どうしたのかと訊くと、昨夜嵐山をたつ時、自分が殿だつたので、いそいで驛へかけつけると、まだ車はうごいてゐない。しめたと腰をおちつけ、さてあたりを見廻はすと、仲間の姿がひとつもみえない。あやしんで隣の乘客にきくと、これは龜岡行どすえ。しまつた!! こちら側の車にのつたんだな。いまはかんねんして龜岡驛へつくのをまつ外はない。驛長にわけをいつて賃金はこらへてもらつたものの、宿屋にとまらうにも錢はなし、この提灯をたよりに、てくてく夜の山路をあるいてきた。

この三十周年の佳節にのぞみ、創立以來十數年間の同僚にして、いまは亡き松山義通君を懷ふ。かうしてかいてゐると、變轉きはまりなき舞臺面がそれからそれと心頭に上つてくる。しかしここには只創立時代の一齣にとどめておく。